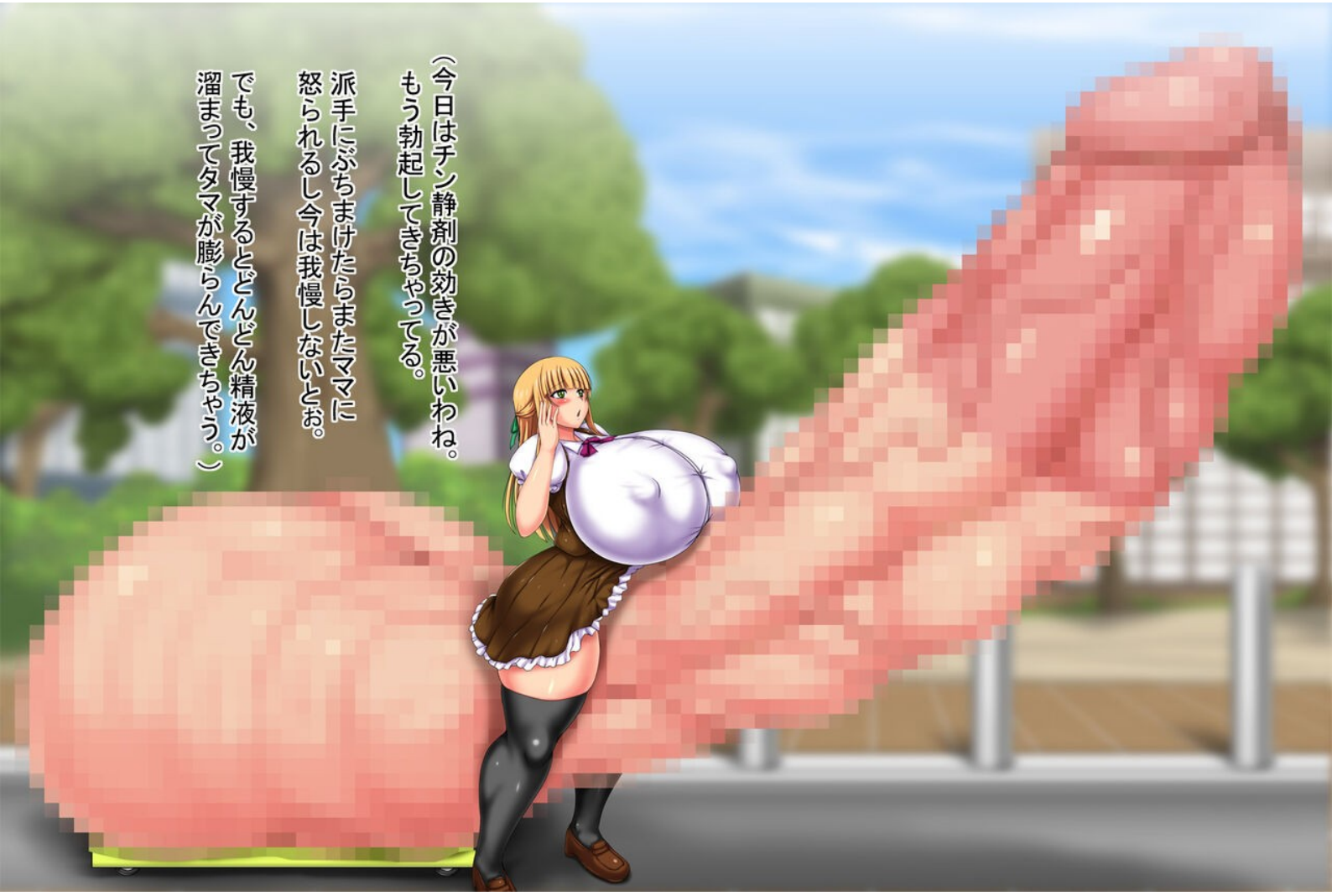
【ナニデカッ！　チン百景】
ネタと絵は元々関係なかったけれど、火力上げに
補正加工してくっつけてみた。世界観は「竜居区」
に近いですが別世界のお話。


（今日はチン静剤の効きが悪いわね。
もう勃起してきちゃってる。
派手にぶちまけたらまたママに
怒られるし今は我慢しないとぉ。
でも、我慢するとどんどん精液が
溜まってタマが膨らんできちゃう。）

（最近さらに生産力上がってきてるから超デカくなる前に急いで帰らないとぉ。
ま、まずい。大きくなるほど進むの遅くなって遅くなるほど大きくなるぅ！）
ドクッ♡ドクッ♡

（もぉ台車からはみ出してぇ。
こ、擦れてタマが刺激されちゃう！
膨張止まんない～～～～っ！）
「ちょっ・・！　キンタマでっかぁあっ！
えっ。　ちょっ！　まだデカくなっ・・
ちょうどタイミング悪く自転車が通りかかり
急激に肥大していくタマを避けきれなかった。

「おほおぉおおおおおおっっ！」
ぶるるん

自転車がタマツキ事故して射精が暴発する光景

（あっ・・。 まずい勃起しちゃう・・！
あのチン静剤効果うっすぅ！
やっぱり安いだけあったかぁ。
射精をやらかす前に帰らないと
おおおおおおおっ？）

「あほぉおおおぉっ！
尿道に何かハまってぇぇって、
し、信号機いっ！
やっばぁあああぁっ！
ぬ、抜けなぁあああぁっ！
おほぉおおおおぉおっ！」

「ちょっ・・・！　ダ、ダメぇぇっっ！」
（尿道ゴリゴリ当たるぅっ！
マジ勃起して信号機まるっと
入りゅうぅぅ～～～。）

信号機で尿道ファックしちゃう光景

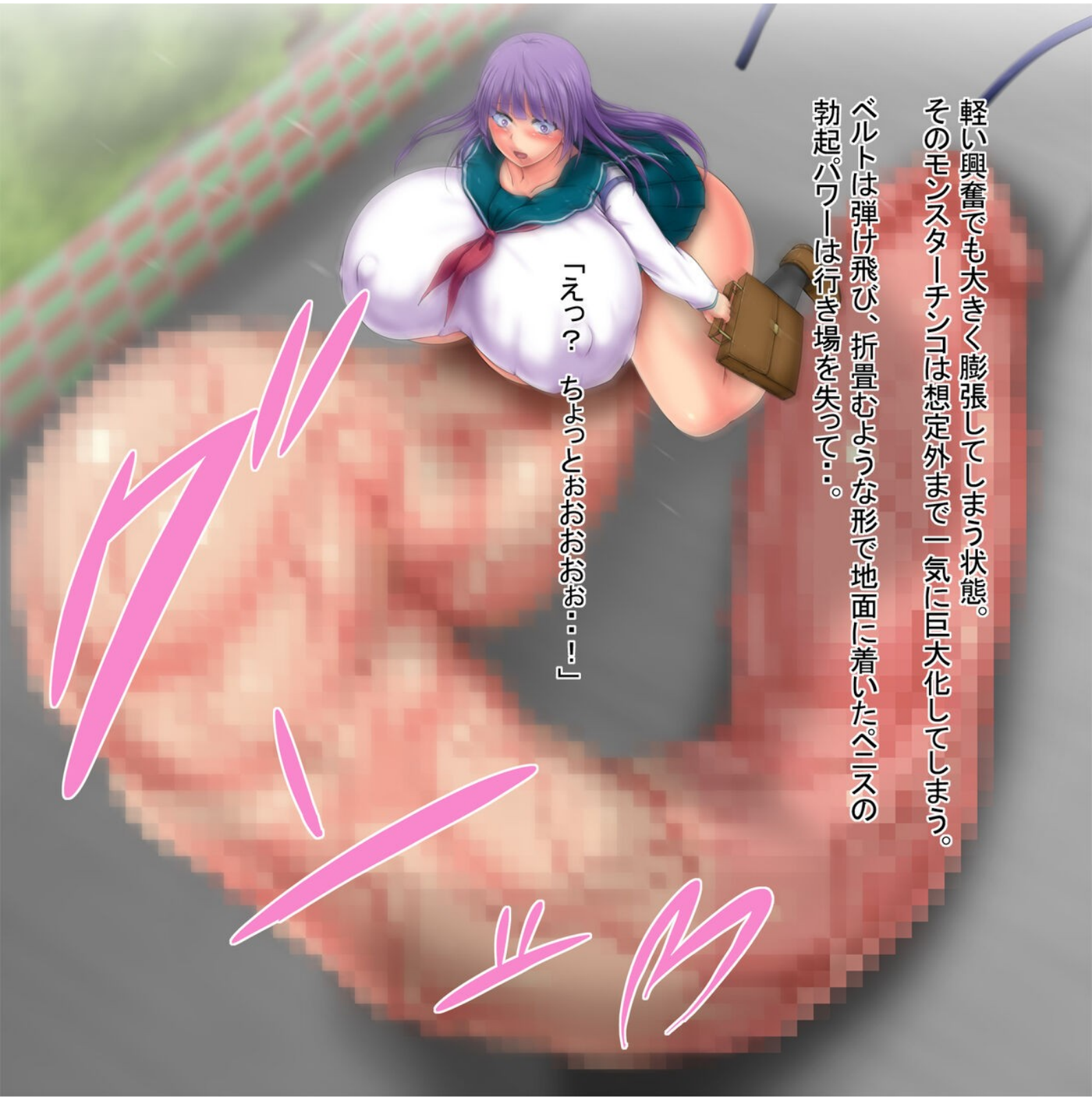
チン静剤(海外製の超強力)はたっぷり打った！
迂闊に擦れないようチンポ位置も良し！
今回こそは初登校を達成する！
通常時で3m超えのモンスターチンコのせいで
様々なチン災を引き起こしては強制転居を
命じられ、学校に通えたことがない。
いまだ成長中の彼女の受難は続く。

『うっわぁっ♪　デッカぁあああっ！
嘘ぉ。あの状態から膨らんできてるって
ことはあれでまだ勃起してないの？』

通りすがる人の熱視線で興奮が高まる。

（お、おかしい・・・！
この程度ならあのチン静剤で抑えられるはず
なんだけど、もうチンポが膨らんできてるぅ！）

何度も試したせいで耐性ができ効果時間が
短くなった上に強力過ぎる故の副作用で
勃起力が増してしまっている。


軽い興奮でも大きく膨張してしまう状態。
そのモンスターチンコは想定外まで一気に巨大化してしまう。
ベルトは弾け飛び、折畳むような形で地面に着いたペニスの
勃起パワーは行き場を失って・・。
「えっ？　ちょっとおおおおお・・！」
ダンッ

ペニス勃起で本体が持ち上がる光景

（マ、マズい。　勃起するほど地面に擦れてさらに勃起するぅぅ！
このままだとバケモノサイズになったチンポが前方に飛び出ちゃうっ！）

異常なまでに膨張し、どんどん硬くなっていくペニスは前方へと
せり出していく。そして、ある程度までせり出た途端、ペニスは
鞭のようにしなり彼女ごと振れ上がり飛び出していく。

勢いよく飛び出たペニスは近くの住宅と住宅の隙間へと
突き刺さる。尋常ではないサイズのそれは引っ掛かり
彼女を宙吊りにしてしまう。
「あぁっ。　ダ、ダメ・・！　チンポが敏感過ぎるぅ！
またぁ擦れて勃起して、勃起するから擦れるぅ！
ただの家でどんどん勃起しちゃうのおっ！」
ギィィ

建物をオナホ扱いする光景

（おおぉ。この建物いいゴッゴッ具合い。射精したい～～っ！
でも、ぶっ放したらまた勃ち退きになるぅ！
あああぁ。でもでもぉ、もぉ我慢無理だよぉっ！）

「くぅほおおおぉぉっ！
いいところに何かの機械がぁ・・・！
振動来る来るぅっ！　あああぁぁっ！
もぉ出るぅ！　というか、これ私ワルクナイ。
こんなオナホみたいな建て方するからだよぉっ！
い、一発目ぇ軽く出るぅ～～～っ！」

住宅の間に突如そびえたった肉の塔から
大量過ぎる精液が噴き溢れていく。

「あああああああああっ！
こらあっ♪　この建物おっ！
そ、そんなに刺激したらあどんどん
出ちゃう～～。　あああひゃああっ！」

住宅はただいつもの日々を刻んでいるだけ。
あまりに巨大なペニスが脈動と膨張で勝手
にあちこち擦れて、勝手に絶頂していく。

『ちょっ・・・家軋んでだけど。ナニごと？
・・・って外に見えるの。チ、チンポぉ？
まさかこれがニュースでいってるチン災！

逃げ・・・いや確かニュースだと迂闊に外
に出ちゃダメだって言ってたはず。』

「おほおおおおおおおおおほおおおおおっ！
ようやくマジ勃起してきたぁあああぁっ！
あああぁっ。次は本気で出りゅうううっ♪
イッグゥウウウ～～～～～ッッ！」

巨大過ぎる故に完全に勃起するまで
時間がかかっていたモンスターチンコ
がついに全力全開で射精し始める。

精液が住宅を埋め尽くす光景
END

【それもぱいスー】

パイロットスーツの略「パイスー」という
言葉を見た時になんかボロンと出た奴。
仕上げられそうな感じがあったけれど
そのまま長らく放置。
後から調整したい衝動が湧き出ない程
諦めがついていたので、そのまま使用。
新たに何枚か追加して、どうにか締めく
くれました。

『・・・どうかな？　獅堂君。
僕の開発した〈ぱい〉ロットスーツは。』

「・・・試作実験と称して、部下の女性にこんなものを着せるなんて。
一度死ねばいいのに、この変態じじい・・・！」

『ふぅおおおぉおお～～～っ♪
いつにも増してクールだねぇ。』

「キモい声上げてないで早くしてください。
こんな体型丸わかりスーツとっとと脱ぎたいので。」

『君のダイナマイツバディなら恥ずかしがることないと思うけどね。
では、要望に応えて手早く済ませようか。
肩にあるダイヤルを一段階捻ってくれたまえ。』

「・・・ひねりましたよ。
それで次は・・・・！
ボ
ッ

「・・・えっ・・？　はぁ？　う、嘘・・・・！
わ、私の胸がデタラメな大きさに・・・・！」

『おおぉっ。　あの「氷の獅堂」こと冷静沈着な君がそう認識したのなら
成功だな。安心したまえ。実際はスーツの胸部が膨らんだだけだよ。
ただそれが自身の胸だと誤認させる機構を組み込んでいるがね。』

「・・・試験中止します。即行で脱ぎます！」

『その部屋の扉の権限はこちらで預かっているよ。
あっ。 言うまでもなくモニタリング中だからね♪』

「このクソじじい・・・！」

『ふぅおおおおおおっ♪
超爆乳クール娘に罵られたっ♪』

「・・っ！ こ、これは偽物なんでしょう！ 超爆乳とか言うな！
そもそもパイロットスーツに意味不明な機能付けないで下さい！」

『ふぉっふぉっふぉ～～。
誤認させていると聞いても自身のおっぱい感は消えてないようだね。
今回のスーツは大成功だね。
あと名前も誤認しているよ。このパイロットのパイはおっぱいのぱい。
超乳を疑似体験するスーツ、それがぱいロットスーツなのさ！』

「・・このクソジジイ・・・！
悪ふざけもいい加減に・・
ボ
ッ

「なんで勝手にまた膨らんでんだよ・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・殺す」
『さ、殺意がマジだ・・・！
いやいや待ちたまえ。これも仕様なのだよ。
ある程度大きくしないと中身を抜いて元に戻せないんだ。
くれぐれも無理には脱がないようにね。
超乳状態で脱ぐとパイモゲショックが強すぎて危険だからね！』

「・・・ちっ！　いつものことだと油断したのが失敗だった・・・！
もう余計なことは言わなくていいですからさっさとこれを
安全に脱ぐ手順を説明して下さい！」

（と言っても、どうせ余計な茶々をいれてくるでしょうけど。
反応したら負け、完全無視でいきます！）

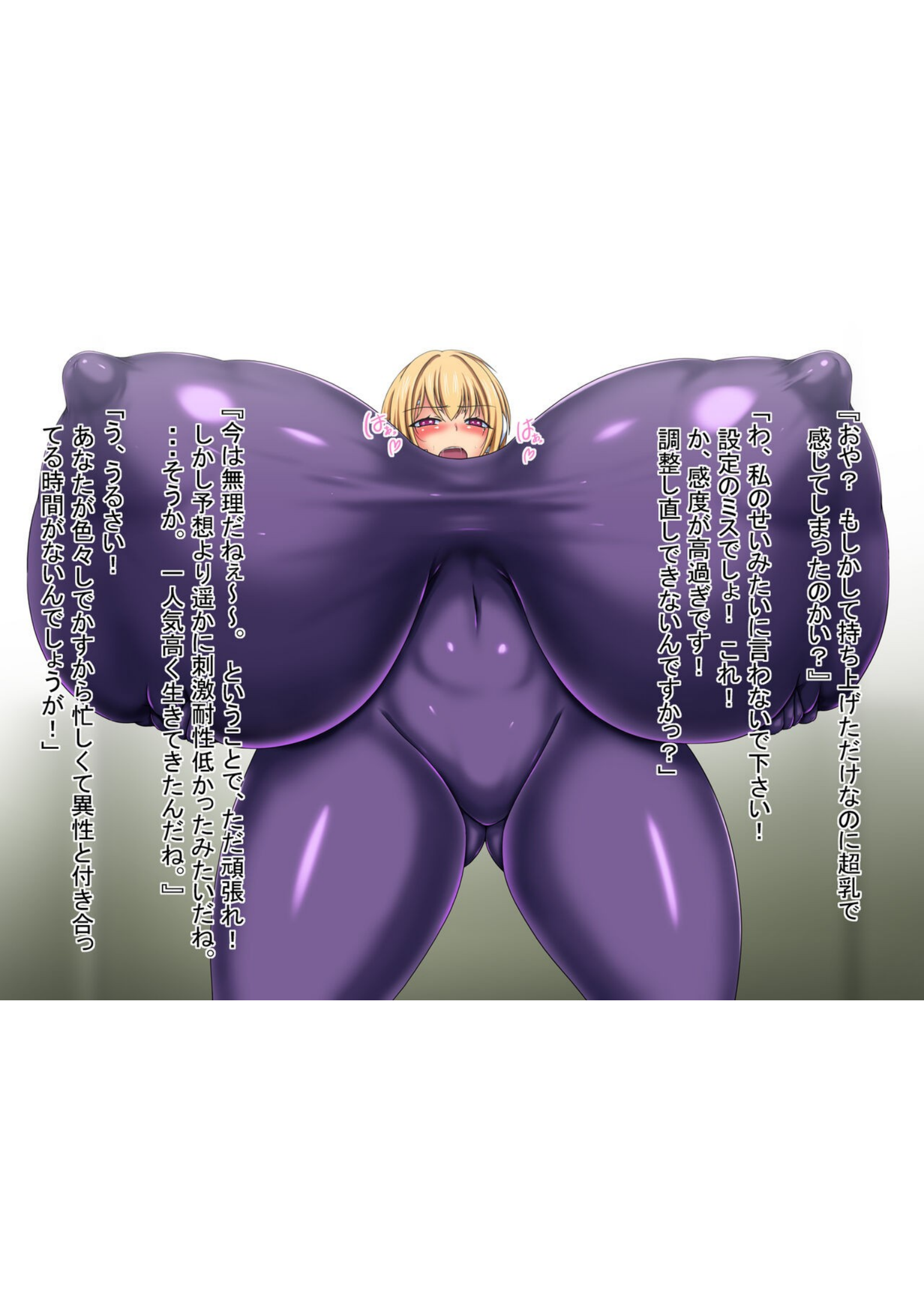
『さすがは獅堂君だ。
冷静さをすぐに取り戻して最良の選択をしたね。
さてそれでは君のその超乳！を元の巨乳に戻して
〈ぱい〉スーを安全に脱ぐ手順を説明していこう。』

『まずは噴射プラグを君の超乳！の先端に取り付ける。
それだけ超大だと直接は乳首に手が届かないだろうが
それだけ超大なら届く位置に変形できるだろう。』

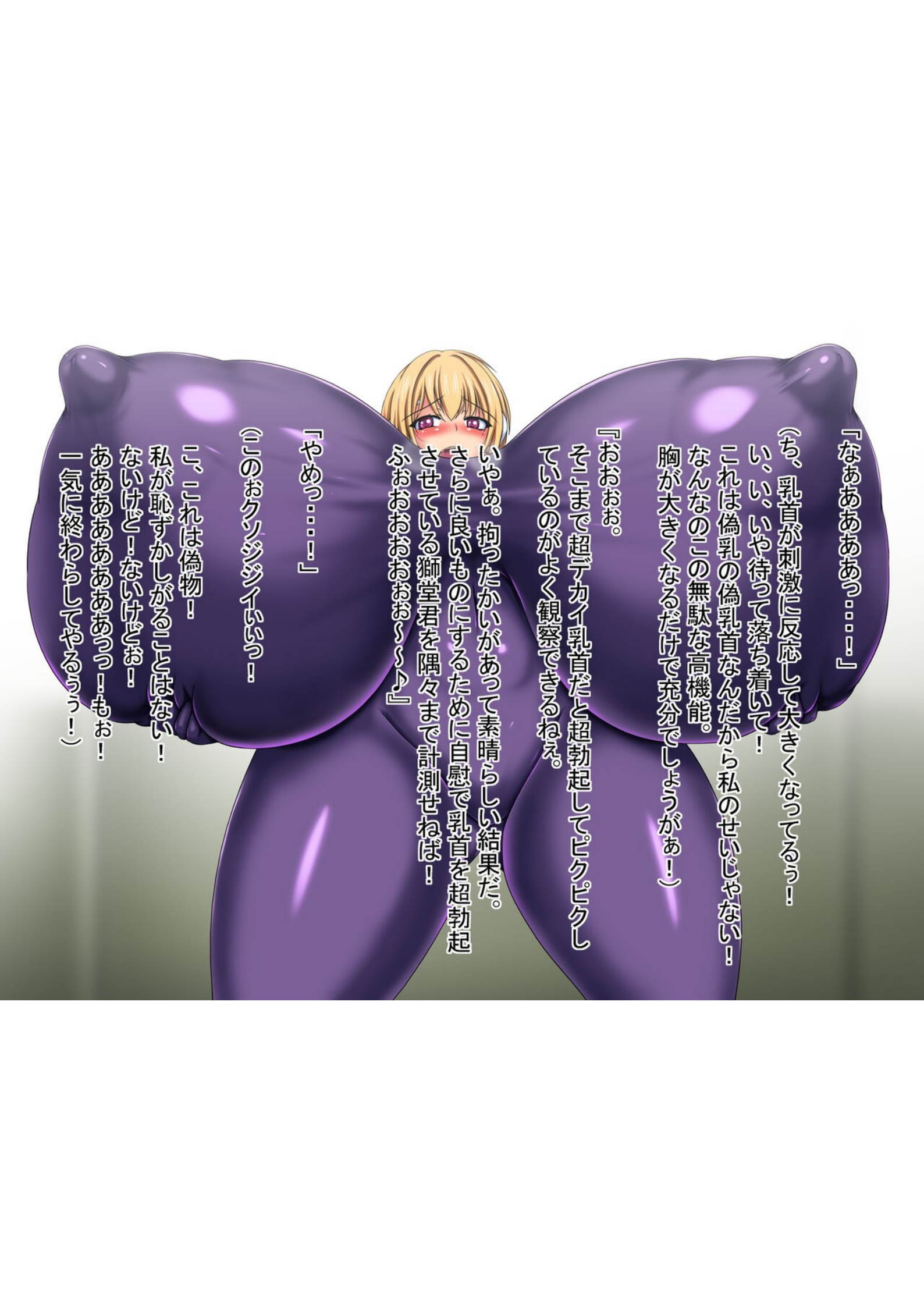
（いちいち超乳を強調するな！　このクソジジイ！
・・・本当のことを全て言う人ではないけど、嘘をつく人でもないから今は言う通りにするしかないか・・。）

「んんっあああっ！」

（なぁ・・ちょっと持ち上げただけで
何かビリビリ来るぅ～～っ！）


『おや？　もしかして持ち上げただけなのに超乳で感じてしまったのかい？』
「わ、私のせいみたいに言わないで下さい！　設定のミスでしょ！　これ！　か、感度が高過ぎです！　調整し直しできないんですかっ？」
『今は無理だねぇ～～。　という」とで、ただ頑張れ！　しかし予想より遥かに刺激耐性低かったみたいだね。　・・・そうか。　一人気高く生きてきたんだね。』
「う、うるさい！　あなたが色々しでかすから忙しくて異性と付き合ってる時間がないんでしょうが！」

「くぅ…ああっ…づぅっ…！
ふぅふぅっ！　ぐぅっ…！」
（ひとまず刺激に慣らしてぇ…！
き、きついけどお極力声は殺す！
クソジジイに聞かせる喘ぎ声なんて持ちあわせていないんだから！）
『自身の超乳を愛撫して乳首を超勃起させていくクール美女。うむ。実に素晴らしい～～。
この姿を見れば男なぞ群がってくるだろうねぇ。』
「ふぅ…！　くぅ…！」
（だ、誰がこんな姿を人に見せるかぁっ！
…って、今なんて言った？
乳首を超勃起？）


「なぁあああっ・・・！」
（ち、乳首が刺激に反応して大きくなってるぅ！
い、い、いや待って落ち着いて！
これは偽乳の偽乳首なんだから私のせいじゃない！
なんなのこの無駄な高機能。
胸が大きくなるだけで充分でしょうがぁ！）
『おおぉぉ。
そこまで超デカイ乳首だと超勃起してピクピクしているのがよく観察できるねぇ。
いやぁ。拘ったかいがあって素晴らしい結果だ。
さらに良いものにするために自慰で乳首を超勃起させている獅堂君を隅々まで計測せねば！
ふぉおおおぉぉ～～♪』
「やめっ・・・！」
（このぉクソジジイいいっ！
こ、これは偽物！
私が恥ずかしがることはない！
ないけど！ないけどぉ！
あああああああああっ！もぉ！
一気に終わらしてやるぅぅ！）

獅堂は息を止めて一気におっぱいを変形させる。
ある程度は刺激を把握している今、獅堂はどうにか耐え抜き
プラグを乳首へと近づけていく。

「あひょおおっ・・・？」
思わぬ間の抜けた声。
それほどの一瞬の衝撃。されど電撃のような大衝撃。
乳首にプラグの先端が触れただけで愛撫とは比べものにならない強烈な刺激が走る。

獅堂は覚悟して再びプラグを挿入しようとするがとても
我慢して突破できる刺激ではない。
しかもその瞬間で終わるとも限らない。
獅堂の手は止まる。

（こ、これ絶対無理いいいっ！
挿したらショック死するってええっ！

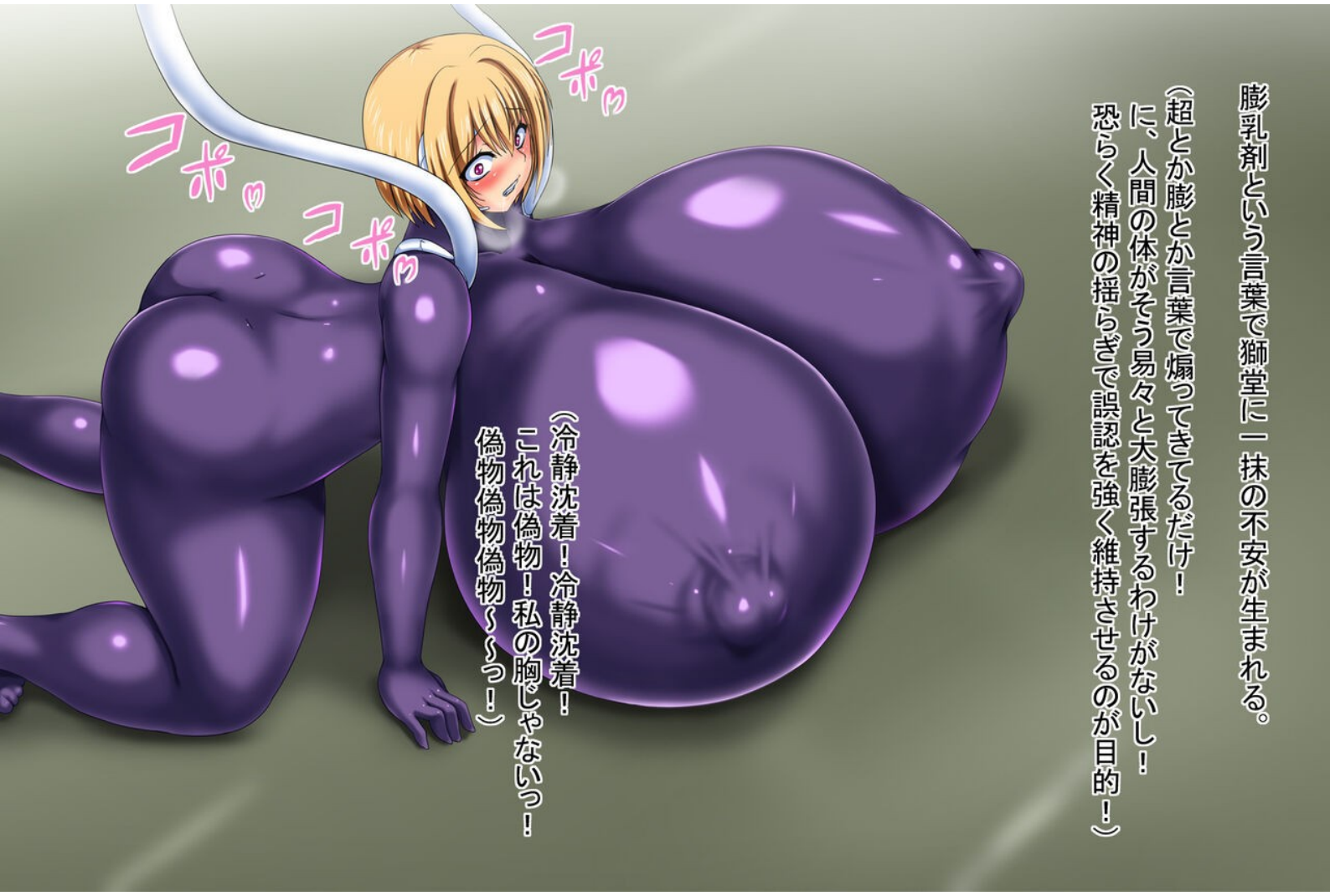
全てあのクソジジイのせいっ！
なんで私がこんな目に遭わなきゃいけないのよお！）

『ストップだ。 獅堂君。
ここで無理をする必要はないよ。
不本意だろうがさらに膨乳していけば君の超乳の感度は
下がっていく。プラグを挿すのはそれからでいいだろう。』
「ふぐぅっ・・・!」
（今絶対に挿す必要はないのは良かったけれど、元々膨乳
させるのが狙いでこの感度だったんじゃないでしょうね。
問い詰めてものらりくらりだろうし、今はとっとと脱ぐ
のを優先・・・!）

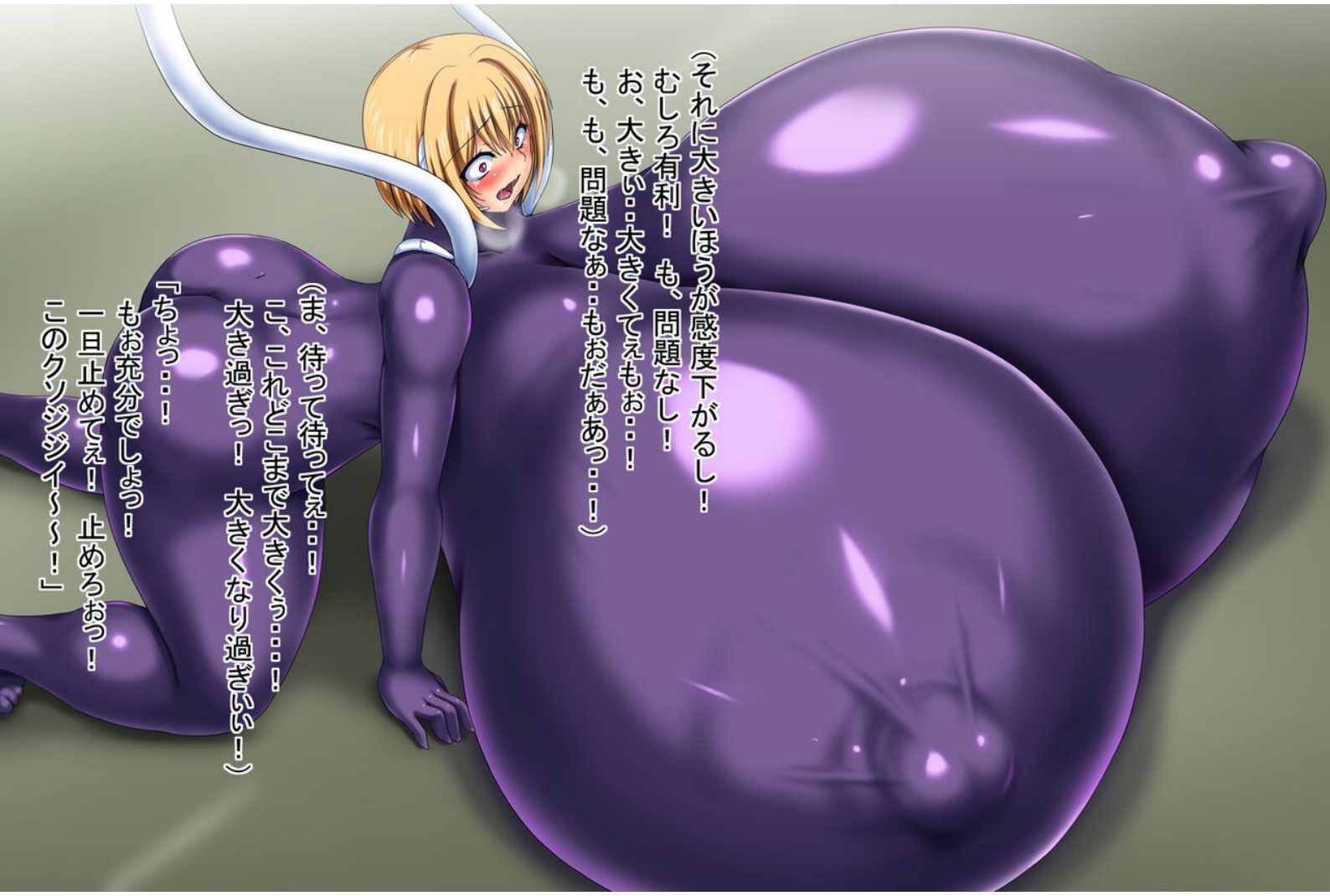
『うむ。その態勢なら問題ないだろう。
その超乳がさらに超大となって超々乳となっても超安心。』

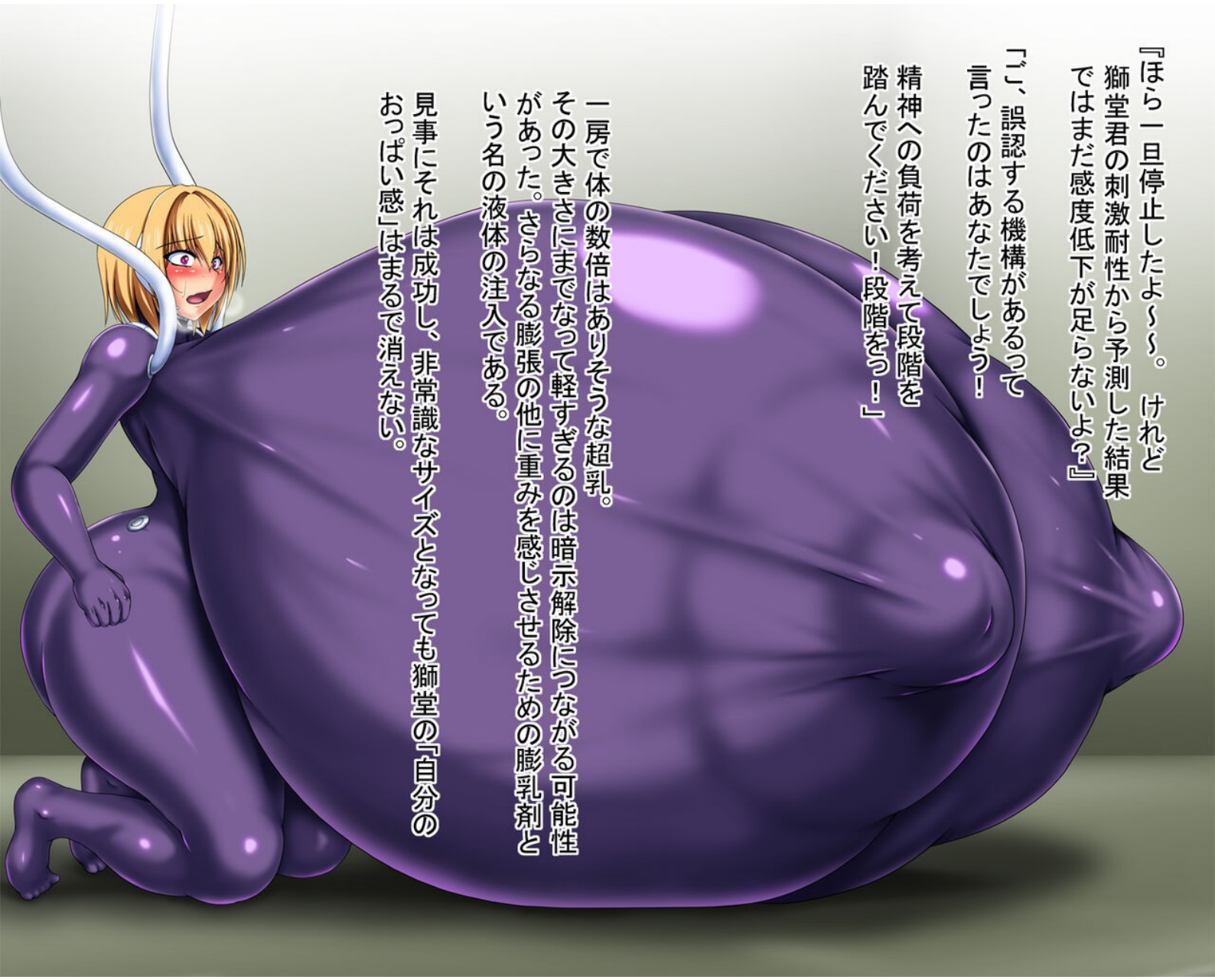
（超超、超超、うるさい・・っ！
・・・と、とにかくち着きなさい、私！
そうこれは私の胸じゃないんだからいくら大きくなった
ところでなんの問題も恥じらうこともないんだからっ！
とっとと感度を下げてこの忌まわしいスーツを脱ぐ！）

『超膨張チューブを接続後、膨乳剤注入開始！
ふぅおおおお～～～っ♪』


膨乳剤という言葉で獅堂に一抹の不安が生まれる。
（超とか膨とか言葉で煽ってきてるだけ！
に、人間の体がそう易々と大膨張するわけがないし！
恐らく精神の揺らぎで誤認を強く維持させるのが目的！）
コポッ
コポッ
コポッ
（冷静沈着！冷静沈着！
これは偽物！私の胸じゃないっ！
偽物偽物偽物～～っ！）

（・・・冷静冷静！
これは偽物――――っ！）
（断然偽物っ！
い、いくら大きくなったって
問題な・・いん・・だからぁ！
実際感度も下がってきてるし
むしろ問題解決っ・・！）
（問題ない問題ない！
い、いくら大きくてもお・・・！）
大モモ・・ロ


（それに大きいほうが感度下がるし！
むしろ有利！　も、問題なし！
お、大きい‥大きくてぇもぉ‥！
も、も、問題なぁ‥もおだぁあっ‥！）
（ま、待って待ってぇ‥！
こ、これどこまで大きくぅ‥‥！
大き過ぎっ！　大きくなり過ぎぃい！）
「ちょっ‥！
もお充分でしょう！
一旦止めてぇ！　止めろおっ！
このクソジジイ〜〜！」



『ほら一旦停止したよ～～。けれど
獅堂君の刺激耐性から予測した結果
ではまだ感度低下が足らないよ？』

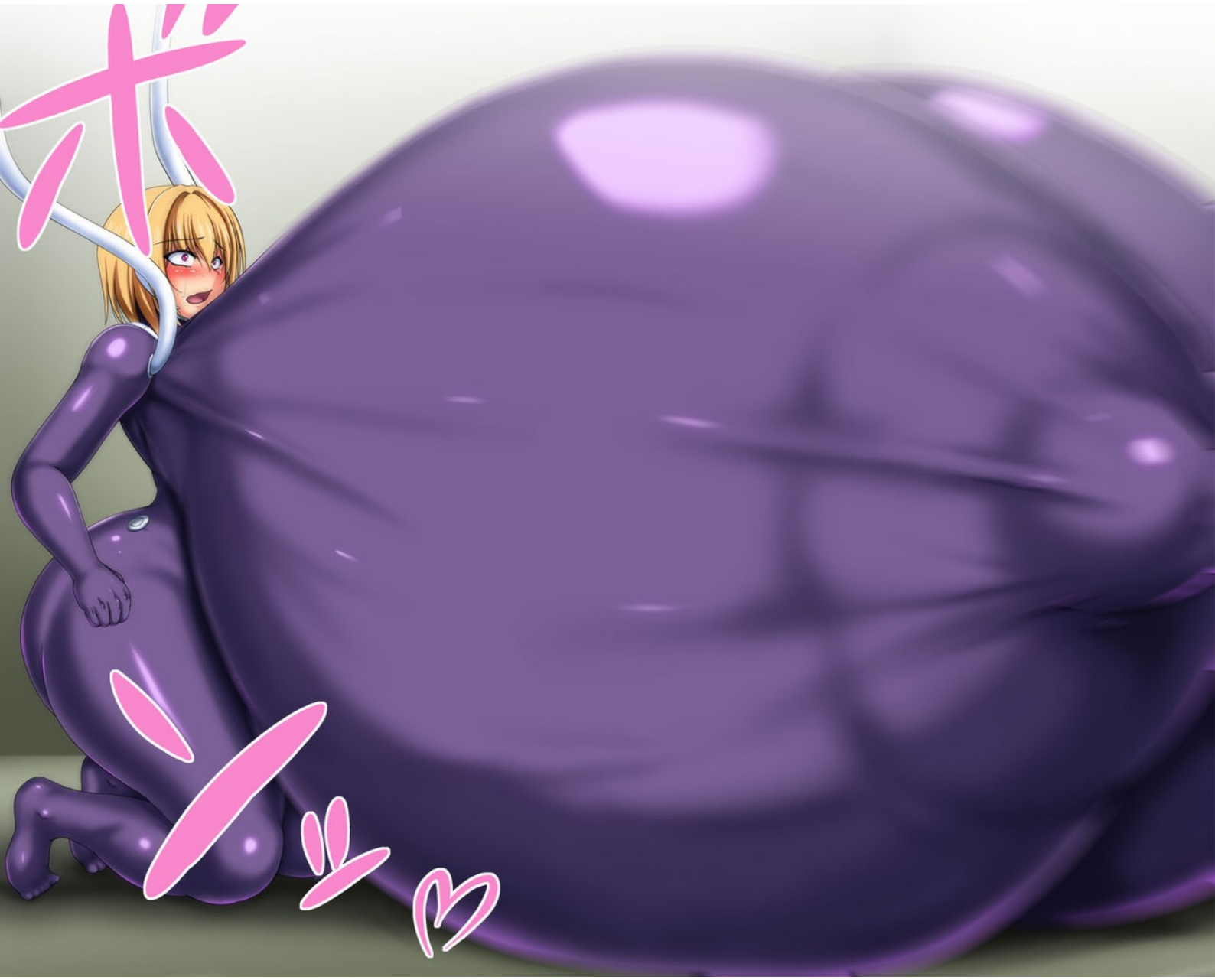
「ご、誤認する機構があるって
言ったのはあなたでしょう！

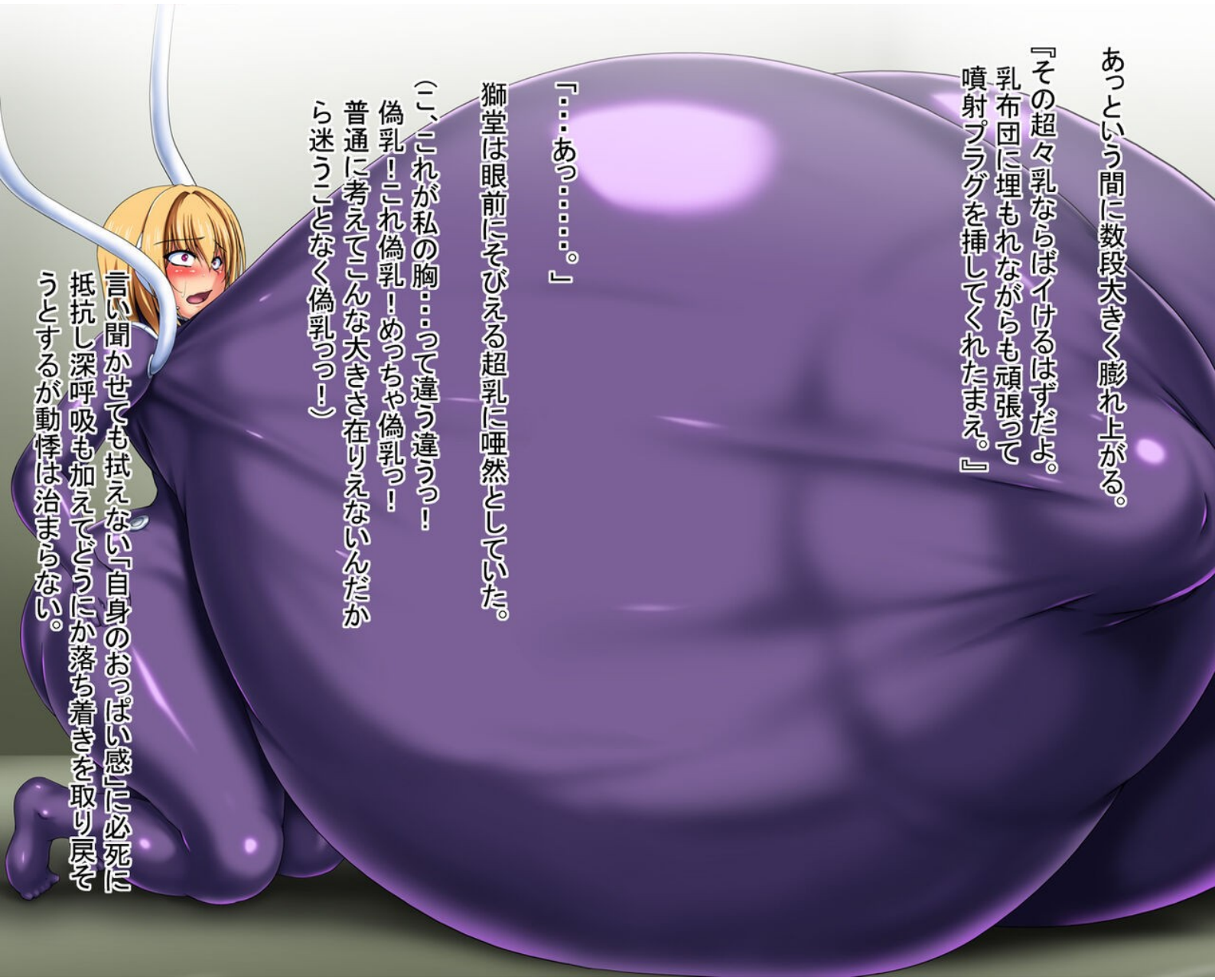
精神への負荷を考えて段階を
踏んでください！段階をっ！」

一房で体の数倍はありそうな超乳。
その大きさにまでなって軽すぎるのは暗示解除につながる可能性
があった。さらなる膨張の他に重みを感じさせるための膨乳剤と
いう名の液体の注入である。

見事にそれは成功し、非常識なサイズとなっても獅堂の「自分の
おっぱい感」はまるで消えない。

『ふむふむ。　なるほど。
そこまでの超々乳になるとあまりの大きさ
ゆえに不安と困惑が生じるわけだね。
いわゆるパイパニックだね。』
「いわゆらねーよっ！
これ試作実験でしょう！
意見はきっちり聞くべき
だと思いますけどぉ！」
『もっともだねぇ。
でも今はどうにもならないからね～～。
うむ。ならばせめて一思いにいこうか。
安心したまえ。そのスーツの限界はまだ先！
それじゃ膨乳剤噴射最大出力！
ぽちっとな。』
「ちょっ・・・！」
チューブに再び液体の流れる音。
その水音は先ほどよりも激しい。
〈っ・・・！
これは偽乳っ！　偽乳！
いくら大きくなっても所詮偽乳～～っ！〉





あっという間に数段大きく膨れ上がる。
『その超々乳ならばイけるはずだよ。
乳布団に埋もれながらも頑張って
噴射プラグを挿してくれたまえ。』

「・・・あっ・・・・・。」
獅堂は眼前にそびえる超乳に唖然としていた。
（こ、これが私の胸・・・って違う違うっ！
偽乳！これ偽乳！めっちゃ偽乳っ！
普通に考えてこんな大きさ在りえないんだから迷うことなく偽乳っっ！）
言い聞かせても拭えない「自身のおっぱい感」に必死に抵抗し深呼吸も加えてどうにか落ち着きを取り戻そうとするが動悸は治まらない。

（と・・・とにかく終わらせることだけに集中・・・
作業のように淡々とこなすのよ！）

「・・・・んっ・・・！」

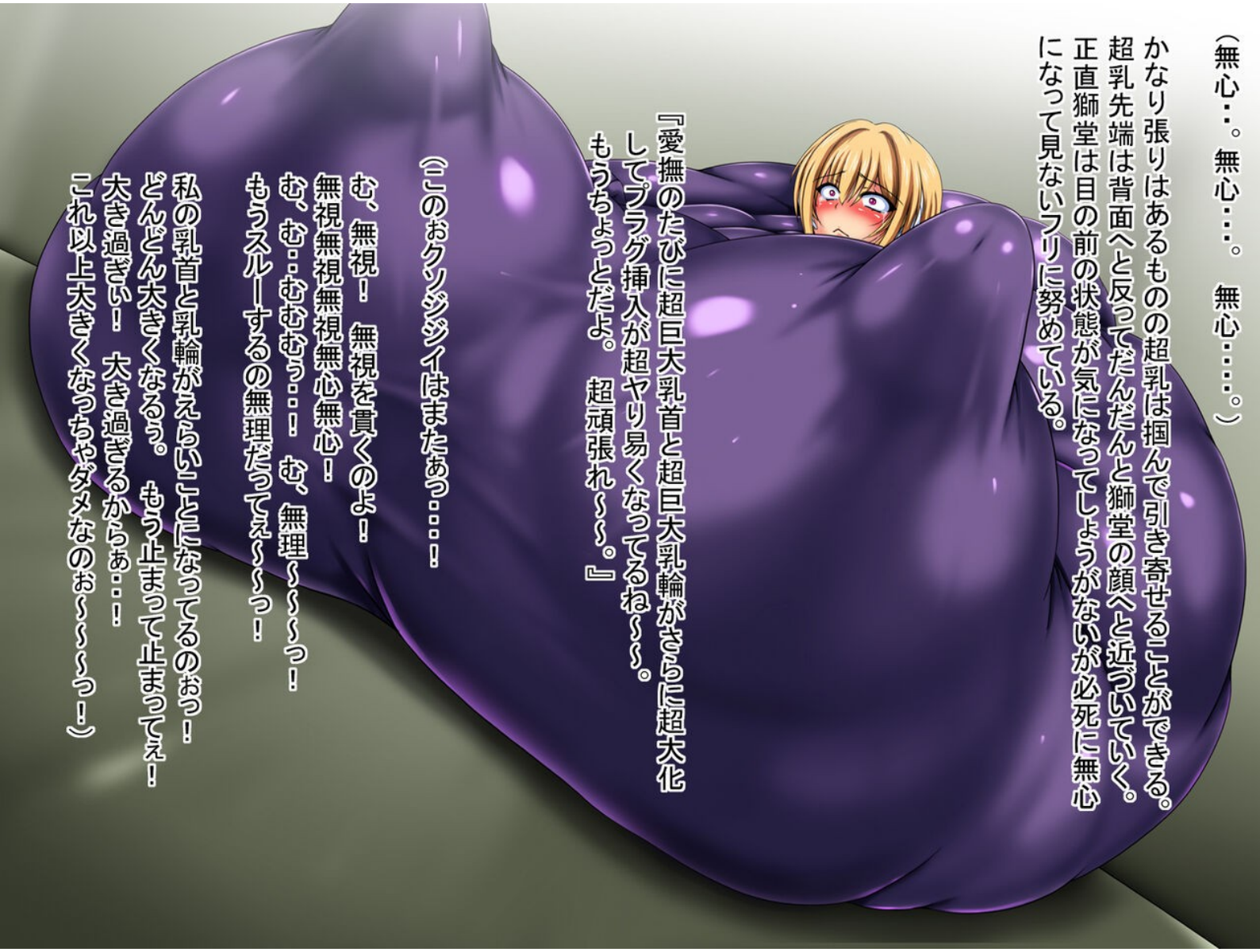
こんな非常識な超乳の勝手など分かるはずもなく
とりあえず腕を伸ばしてみるしかない。

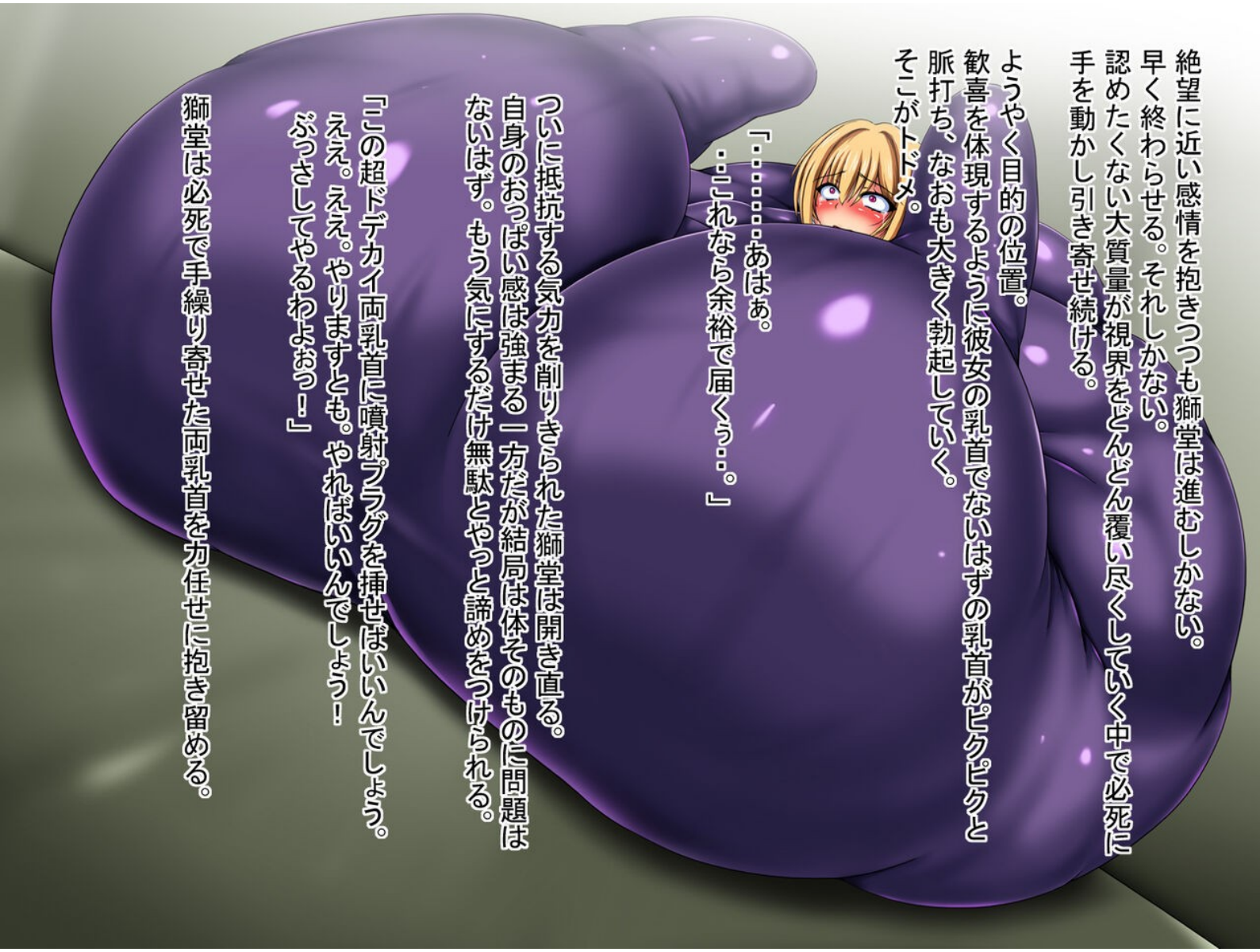
（クソジジイの言う通り感度は問題ない。
少しゾクッとするぐらい。
これなら乳首を手繰り寄せて・・・。）

獅堂が前のめりになって超乳に体重がかかる。
すると超乳前方が盛り上がり、獅堂の視界に入った
乳首と乳輪がさらに盛り上がっていく。

（ちょっ・・・ただでさえ大きい乳首があ・・・・！
っ！　か、考えちゃダメ！　無視無視無視～～！）

元が巨大なため軽い刺激の軽い勃起でも目に見えて変化が
分かってしまう。非常識どころか非現実的なのに自身のおっ
ぱい感は揺るがない。動揺が誤認を強め、強くなった誤認が
動揺を招く。獅堂は完全にドツボにはまっていた。


（無心・・。無心・・・。　無心・・・・。）
かなり張りはあるものの超乳は掴んで引き寄せることができる。
超乳先端は背面へと反ってだんだんと獅堂の顔へと近づいていく。
正直獅堂は目の前の状態が気になってしょうがないが必死に無心
になって見ないフリに努めている。
『愛撫のたびに超巨大乳首と超巨大乳輪がさらに超大化
してプラグ挿入が超ヤり易くなってるね～～。
もうちょっとだよ。　超頑張れ～～。』
（このぉクソジジイはまたぁっ・・・！
む、無視！　無視を貫くのよ！
無視無視無視無心無心！
む、む・・むむむぅ・・！　む、無理～～～っ！
もうスルーするの無理だってぇ～～っ！
私の乳首と乳輪がえらいことになってるのぉっ！
どんどん大きくなるぅ。　もう止まって止まってぇ！
大き過ぎぃ！　大き過ぎるからぁ・・！
これ以上大きくなっちゃダメなのぉ～～～っ！）



絶望に近い感情を抱きつつも獅堂は進むしかない。
早く終わらせる。それしかない。
認めたくない大質量が視界をどんどん覆い尽くしていく中で必死に手を動かし引き寄せ続ける。

ようやく目的の位置。
歓喜を体現するように彼女の乳首でないはずの乳首がピクピクと脈打ち、なおも大きく勃起していく。
そこがトドメ。

「……あはぁ。
……これなら余裕で届くぅ……。」

ついに抵抗する気力を削りきられた獅堂は開き直る。
自身のおっぱい感は強まる一方だが結局は体そのものに問題はないはず。もう気にするだけ無駄とやっと諦めをつけられる。

「この超ドデカイ両乳首に噴射プラグを挿せばいいんでしょう。
ええ。ええ。やりますとも。やればいいんでしょう！
ぶっさしてやるわよおっ！」

獅堂は必死で手繰り寄せた両乳首を力任せに抱き留める。

「あっ・・んんっふんんっ・・！」
乳首の方が感度が高いのを失念して乱暴に扱った結果
思わず喘ぎそうになり堪える。
自身の失態で一段と気が荒くなっていく。
（・・とっとと終わらせてやる！
「この感度なら挿入可能」は嘘じゃないはず。
なら一気にぶっさしてやるわ！
過程なんか観察させてやるものですかあっ！）
「ふっ・・・！　っ～～！」

先ほどの失態を踏まえて獅堂は歯を食いしばる。
悶える声など聞かせる気は毛頭ない。
だが、最初はつつくだけで電撃のような刺激だったそれ。
大幅に減退していても強烈なのは相変わらず。
「くぅっ・・あああぁっ！
んんんんっ！
ひぃあああぁっ！」
ブチュッ♡
刺激が突き抜けきるまで堪える。
色々と溢れだしそうなのを押しとどめきる。
それでも制御不能なものが一つ。
刺激の直撃を受けたそれはすでに巨大なくせに
一気に、大幅に、巨大化していく。

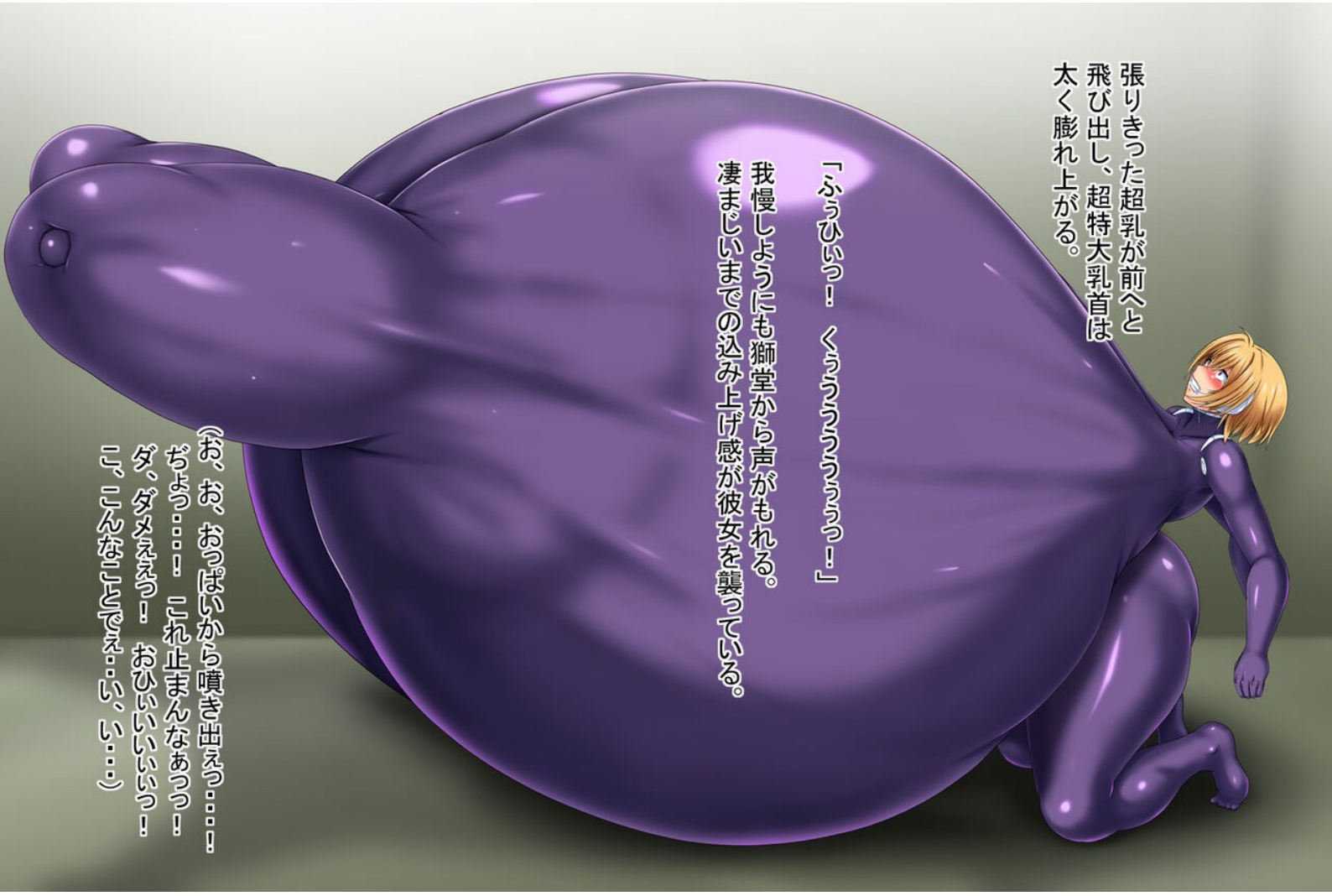
獅堂は反射的に腕で抑え込もうとするが
止まるはずもなく、乳首は先ほどの状態
が可愛らしく思えるほどにまで勃起し尽
くす。
「・・っ・・・・・!」
はぁ〜
はぁ〜
開き直ったはずの意識が硬直する。
(わ、私の乳首がもお化物みたいに無様にぃ・・・!
ぐぅ・・!ダメ! い、今さら取り乱すなっ!
立ち止まっても無様を晒し続けるだけなんだから。
もう片方も即行!もお勢いでいくのよ!私い!)

不安を振り切るように即行で両乳首に噴射プラグを挿入しきる。丸太のようになった乳首を無視しようにも激しく脈打つため意識から外せない。

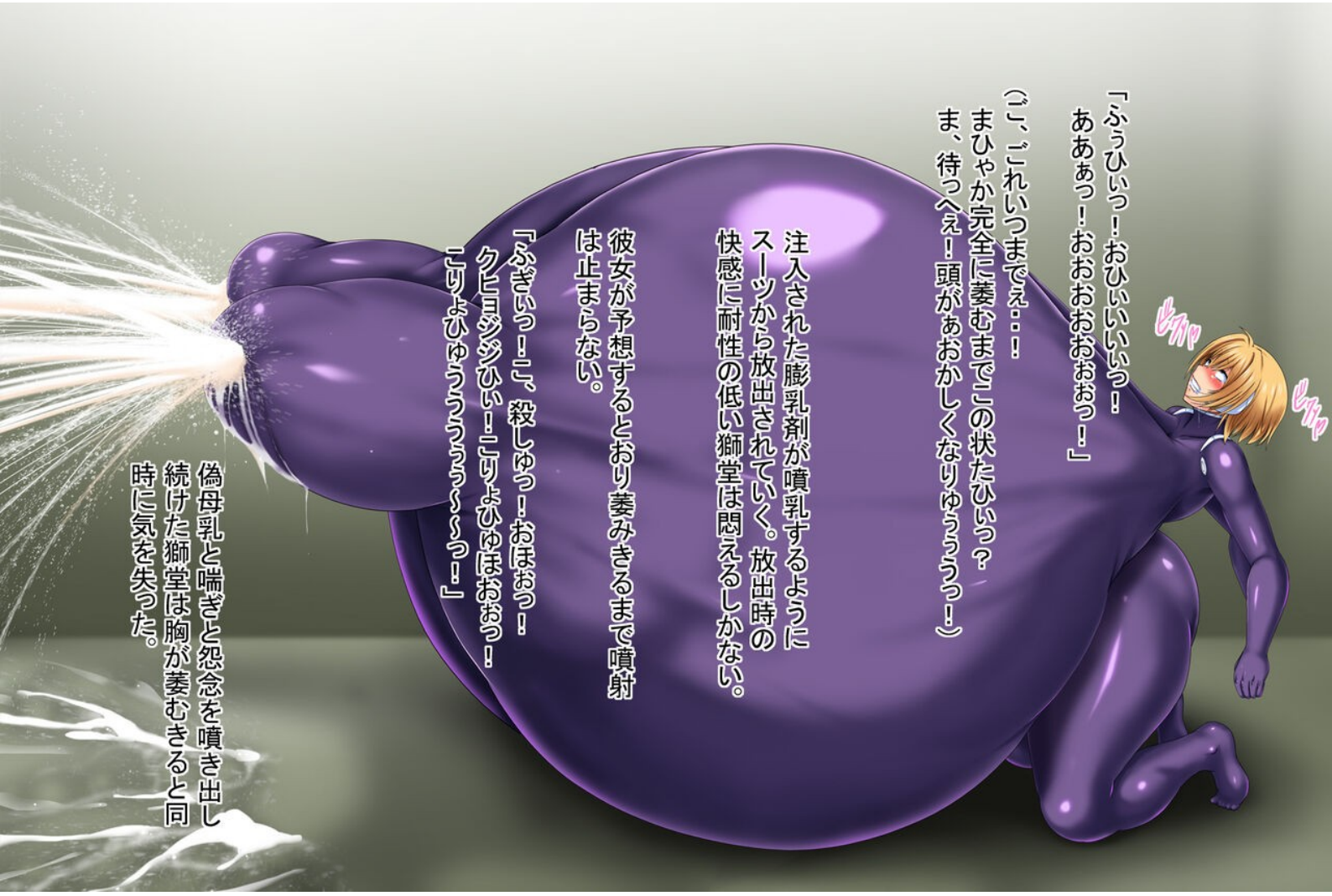
脈動は胸全体へと広がる。

そして、超乳が抱え込めない程に猛烈に張ってくる。

「・・ちょっおおぉぉっ？」


張りきった超乳が前へと
飛び出し、超特大乳首は
太く膨れ上がる。
「ふぅひぃっ！　くぅぅぅぅぅぅっ！」
我慢しようにも獅堂から声がもれる。
凄まじいまでの込み上げ感が彼女を襲っている。
（お、お、おっぱいから噴き出えっ…！
ぢょっ…！　これ止まんなぁっっ！
ダ、ダメぇぇっ！　おひぃぃぃぃっ！
こ、こんなことでぇ…い、い…）

「イッグウウウ〜〜〜ッ！」


「ふぅひぃっ！おひぃいいいっ！
あああっ！おおおおおおっ！」
（ご、ごれいつまでぇ・・・！
まひゃか完全に萎むまでこの状たひぃっ？
ま、待っへぇ！頭がぁおかしくなりゅうぅうっ！）
注入された膨乳剤が噴乳するように
スーツから放出されていく。放出時の
快感に耐性の低い獅堂は悶えるしかない。
彼女が予想するとおり萎みきるまで噴射
は止まらない。
「ふぎぃっ！こ、殺しゅっ！おほぉっ！
クヒョジジひぃ！こりょひゅほおぉっ！
こりょひゅうううぅう〜〜っ！」
偽母乳と喘ぎと怨念を噴き出し
続けた獅堂は胸が萎むきると同
時に気を失った。
ビスッ
ビスッ

数日後。

「ほら早く実験の続きをしましょう・・。
私をこんな風にした責任取ってもらいますからね。
博士？」

火照った様子の獅堂が着込んだ「ぱいスー」を露わにする。

（なっ・・！　まさか氷の獅堂が快感に堕ちるなんてエロゲみたいな展開にぃ・・！　これはこれでグッドなのだが。
物足りぬ！　物足りぬのだよ！　獅堂君！

まぁ。とりあえずは便乗するけど。）

二人は周りに影響がない実験室へと移動する。

博士はモニタールームへと入ると物が少ないことに気づく。
そして、獅堂はその部屋の手前、扉の前で立ち止まる。
その笑顔はなんかヤバい。

「はい。これでのらりくらりと逃げられません。
いつも通りに叱ろうとするとすぐ発明品で逃げおおせますからね。さてと、覚悟はいいですか？　変態クソジジイ。

このスーツ、誤認機能は解除できたので膨張条件と制限も外しました。さすがは変態的技術力。後から調整はできても一から産み出すのは私にはできませんね。

：どこまで大きくできるのか。
約束通りに実験開始です。

そんなに好きなら、理想に抱かれて圧死(仮)しろ。」

「少しは反省しましたか？」

『ぐぅふぅおおぉぉっ！
あ、甘いね。獅堂君。
むしろご褒美っおぼぉっ！』

「・・そうですか。
本当に変態ですね。
ちょっとだけ死んでみてください。」

『や、やはり獅堂君はそうでなくては。
君の超絶超乳に潰されるなら本もお
おおおおお・・・・・

「マジ死ね・・・！」

END

ただ並べるのもなんなので、追加・加工・補正して
強引にネタに突っ込み、せめて設定で火力を上げ
てみました。それぞれの絵の元設定とかは次の
機会にリサイクルストック。

「人間族」は「魔羅族」のオナホであった。
多種多様な形態ながら必ず青色の肌と両性具有である魔羅族は圧倒的能力を持ち、人間は欠片も抵抗することはできない。
人間族を不憫に感じた神は彼らに「セイイブツ」を与える。
魔羅族は快感を何よりも優先するため、性交渉という形で戦いに挑めば、武力で瞬殺されることはない。
セイイブツは巨大で強靭なペニスをもつ魔羅族に性的に対抗するために与えられた神（ヂン）器である。

【人間族・女性】
希少な男性は匿われているため、常に最前線で活動する。
いつでもどこでも魔羅族の規格外巨根で酷い目に遭うけど
めげずにイきている。
【魔羅族・クラーケン種】
女性体の足の部分が6つの触手に別れたような形態
をしており、自在に動かせる2本の巨大ペニスを持つ。
足が6本生えているため、どの固体も尻が特大サイズ。
ペニスは最低でも2mはあり、人間は子宮内でとぐろを
巻かれる。

適合者がセイイブツを使うことでフタナリ化し
魔羅族を性的に屈服させ気絶させることで
人間はようやく魔羅族を討伐できる。

【亀王剣カリ＝バーン】
剣根型精射物。
先太りでカリ高のペニスが生える。
刺激を受けるほど亀頭が膨れ上がり
さらにカリ高になる性質なため、一度
ハメると簡単には抜けない。

【アイナ＝カルルナ】
現在のカリバーンの適合者。
発動開始時で156cm巨根。
最大で219cmに達する。

歴代適合者の中でも最大級の
肥大率を誇る亀頭は体内に押し
込められた爆弾のよう。

カリで引っ掻き回しても、強引に
中身ごと引っこ抜いてもよし。
相手は悶絶する。

「そのまま全てを刈り取ってあげる♪
　おほぉぉっ！亀頭デカ過ぎてすぐイックゥッ！」

射精しやすいのが弱点だが、そこは精力と体力
で補っている。

【練玉剣カリ＝ボール】
剣根型精射物。
巨大キンタマを備えた
ペニスが生える。

事前に精液を溜めておく
ことができるが、その分
タマが肥大してしまう。

【リィゼリーナ＝ウォード】
現在のカリボール適合者。
常時、102cm巨根。
タマは最小時でも地面に
着くほどの大きさ。

常時発動できるほど適正が高いので、精液を溜め込む都合上いつもフタナリ化している。
精液生成は完全に制御できるわけではないため、しばしば身動きが取れなくなっては、仕方なく精液をぶちまけている。
おかげで「セイ女」と呼ばれるが本人は微妙な気分。
「あら・・あらららららぁ・・！
また大きくなってしまいましたぁ。
ここで出すとお店が大変なことに。」
精液量が凄まじいため躊躇う彼女に周りの人々は「むしろ祝福です！」と射精を促す。
辺りは歓喜と精液で埋め尽くされる。

【激突槍グングニル】
槍根型精射物。
わずかな興奮と刺激の増減で
勃起具合が変化するタマなし
ペニスが生える。

【ブレンダ＝カルマイン】
現在のグングニル適合者。
グングニルの特性上、普通にして
いても脈打つようにペニスの長さ
が変わる。最小で205cm。
最大で706cmに達する。

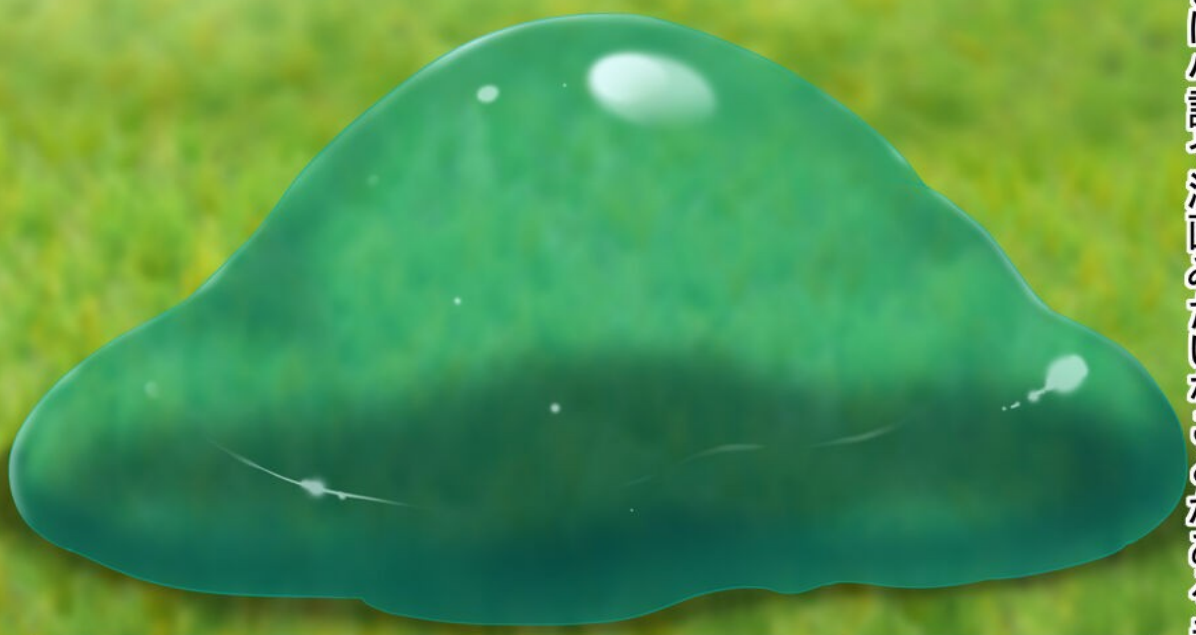
【魔羅族・クインビー種】
異常なまでに尻が巨大で、その質量
と弾力で跳躍し、空中を跳び回る。
ペニスは50cm程度だが、いくつもの
反しイボがついており、一度入れると
引っかかりまくって抜けない。

「オナホの分際でぇこのボクを何度もぉほおぉっ！
ボクの超尻を突き抜けても尚この腹ボコぉおぉっ！
人間ごときがケンタウロス並のモノを持つなんて
聞いてないぞぉほおおおぉおおおほぉぉっ！」
超尻にズられては勃起し、落ち着いては縮み、
そして、また勃起。自動で何度も激しく突き上げ
る。これぞ激突の名を冠するロングサイズ巨根。
「あああぁ。 そろそろイクわよぉっ！
ぶち抜けぇっ！ あひぃほおぉおおおぉぉっ！」
射精の瞬間には最大サイズになる。
7m肉槍に貫かれ、クインビーは壮絶にイった。
END

スライムといえばおっぱい（？）ってことで何か出た奴。
スライムネタはこれを含めて二つあって、もう一方がまだ
仕上げられる可能性が高い上になにかと被るので強制
終了放出。スライムといえば捕食の「おっぱいで捕食」
は別の機会にて。結果、ただの強制膨乳になりました。

さて驚くことなかれ。
自分は死んでスライムとして異世界転生した人間の男である。ほんとに小説や漫画みたいなことがあるもんだ。

スライム　Aさん



スライム　　LV：4
「捕食1」 自身の体の2倍ほどの体積が相手ならば取り込み消化できる。
「物理耐性5」 物理攻撃を軽減する。
「結合再生」 攻撃を受けて分離した部位が結合するとその時受けたダメージをほぼ回復する。

創作物では魔王だったり幹部だったりするスライムだが残念ながらこの世界ではザコの中のザコ。どうにか生き延びるだけの精一杯の日々である。

今は危険極まりないので対冒険者戦闘は避けている。
スライムとなったからにはいつか美少女爆乳冒険者に襲いかかりたいもの。それを支えにザコ生活を必死に生き抜く。

だが、そう上手くはいかないのが人(スラ)生。
ある日、森の中、美少女爆乳冒険者に出会ってしまった。
好みどストライクで見惚れて逃げ遅れる。

「あっ♪スライムです♪
私好きなんですよねぇ。スライム♪」

突然の好き発言に完全に動きを止めてしまう。
・・・そして、躊躇なくぶった斬られた。

「斬っても斬ってもすぐ再生するから斬り放題♪
はぁ～～。いいですよねぇ。スライムぅ。
あはぁ。感触も意外と肉っぽくてたまりません
～～～～～♪」

爆乳美少女だけど中身は残念なタイプだ、と
感想を浮かべている余裕はない。
結合再生では全回復しない。じりじりと体力を
削られていく。しかもどんどん剣速と威力が上
がってきて、耐性も意味をなさない。
拷問のような攻撃に体力がレッドゾーンへ突入。

だんだんと意識が薄れていく。
爆乳美少女にヤられて死ぬのがせめてもの救いか…。

「…んんっ！
はぁ、残念。死んじゃいましたか。スライム。
もうちょっとでイきそうだったのにぃ…。」

「う～～。しまった。調子に乗ってまた汚しちゃった。
宿の人に怒られるから綺麗にしとかないと。
最後に温泉に寄って帰ろうっと。」

ど～も。スライムAです。
死んだと思ったかい？
ところがどっこい生きとったよ。

意識はしばらく前に戻ってたけど宿主の
爆乳娘が魔力含有温泉に入ってくれたこ
とで体も回復して「寄生」からの宿主操作
で体を乗っ取れました♪

「ふっ・・・・ぎぃ・・・んんん～～～～～っ！」

宿主の意識があるせいでスムーズには動かせ
ないが現状の肉体支配はこちらにある。
彼女に行動の拒否はできない。

さてと刻まれたお返しにたっぷりと魔力温泉
をガブ飲みしていただきましょう！

新たにスキルを獲得しました。

「寄生」 相手の体内に潜り込んだままでも生存できる。
「魔素吸収1」 魔力を一定以上含んだ物体を吸収することで回復及び再生。
さらに一時的な増強が可能。
「宿主操作1」 寄生した相手の肉体をある程度操作できる。

「おぼぉおおぉ・・！」
抵抗してくるので細かい動きはできず
大雑把になる。溺れるような勢いで
温泉を流し込むことになっている。
やはり直接の吸収は効率が良い。
ぬぅおおおおおおおおお。
増強キタァァァ――――ッ！
魔素吸収による増強でスライム体が
膨れ上がっていく。今は寄生中なので
宿主ごと膨れていく。

爆乳が大爆乳へと変化する。

もちろんこれで終わりではない。
念願と仕返しでテンション上がり
まくりで歯止めなど利かない。

限界まで増強してやるぜぃ！

「やっ・・ぼおべぇぇぇぇっ！
ごおくうごぼおんんんっっ！」

彼女に下手に意識があるのがまたよろし。

おらおらっ！斬撃サンドバックされたお礼だ！
膨乳サンドバック！デタラメサイズまで膨らみ
やがれ！飲～んで飲んで飲んでっ！

飲むほどに自身のスライムボディは増強され
宿主である彼女のおっぱいは肥大していく。

ほう。では、ステータスチェック。
彼女の名はアステシア＝フォーレン。
そのレベルは88。　高っ・・・！
よく寄生して操作できたな、これ。

新たにスキルを獲得しました。

「増強度宿主ボーナス」　寄生した宿主のLVに応じて
増強限界が上昇する。

増強限界はまだまだ先っぽいので
さらにハイペースで飲ませていく。
「ぼぉえぇっ！おぇえっ！」
う～～～む。
さすがに無理させ過ぎて顔色が
えらいことになってきた。
こんな高レベル相手に寄生できた
のは奇跡かもしれないし、彼女が
潰れてしまうのは勿体ない。

口からだと限度があるということで
試しに肥大した乳首から吸ってみたら
見事に吸えました♪
口が二つになって吸収二倍二倍〜〜♪
「〜〜っっ・・・！」
（か、体がどんどん動かせなくなってぇ！
これいったい何の攻撃なのぉ！
嘘ぉ。まだおっぱい大きくなるぅぅっ！）

「〜〜っあっ・・・！」

（おほおおおおおおおおほひぃほおおおぉぉっ！
おっぱいぃイクイクイクイクイクイクぅウッ！
あひぃっ！ほおぉぉっ！イクの止まんなぁっっ！
大きくなるたびにイックぅウぅウ〜〜〜ッッ！）

体が上手く動かせない彼女は表情をあまり
変えることのできないまま絶頂していく。

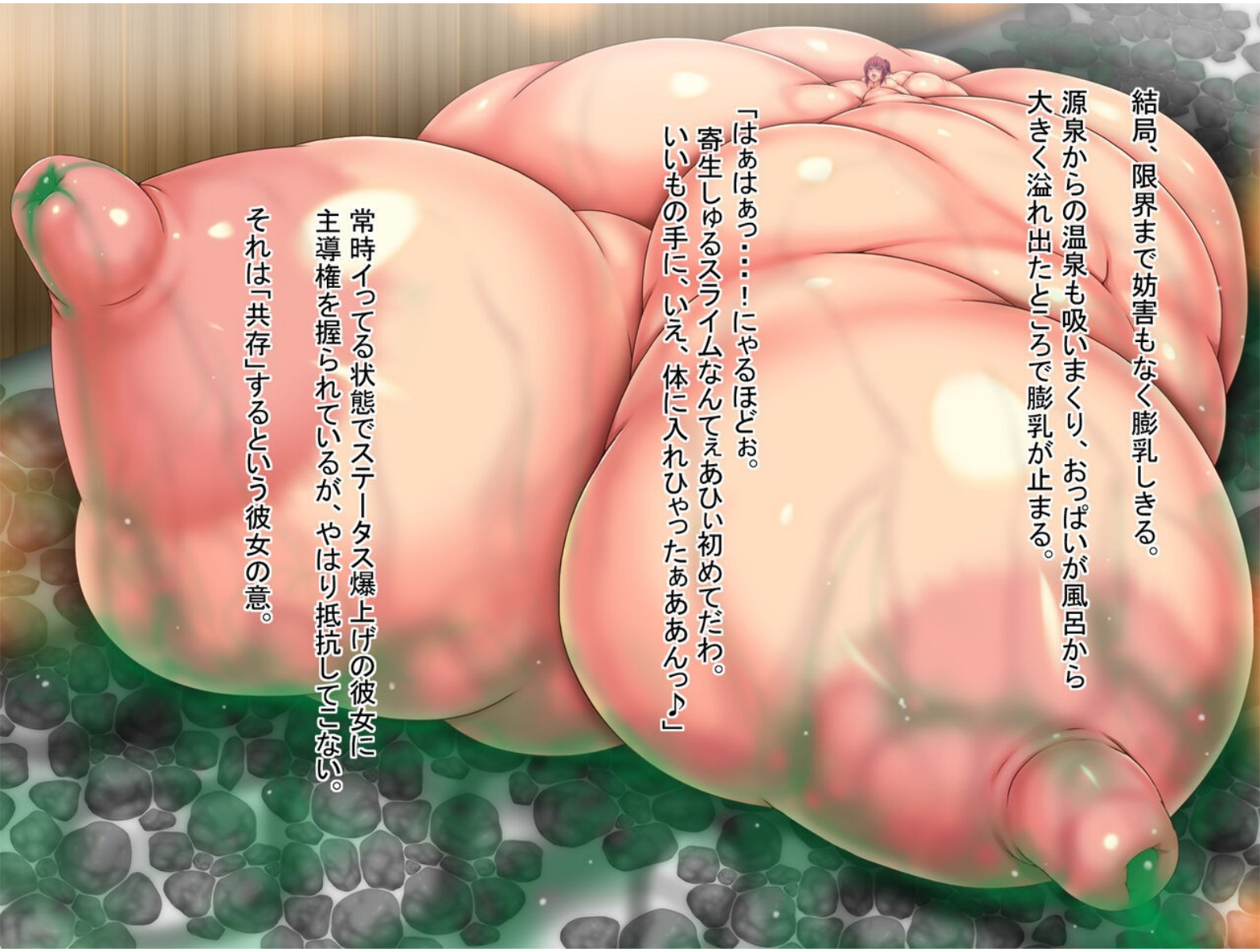
乳首から温泉を吸い上げる行為は相当な
快感のようだ。

「こ、これ気持ちいいひぃいいいっ！
おっぱいで吸って、おっぱい大きくなりゅのぎもぢいいいっ！
おほおおおおおっ！まだまりゃ吸ってりゅのおおおおっ！」
膨乳が進む中、彼女は声を取り戻し表情も変わるようになる。
一部の操作をカづくで奪い返された。
前に攻撃が増していったのはこのスキルのせいだろう。
ビクッ♡
ビクッ♡
宿主の固有スキル
「エクスタバーサーク」 興奮・絶頂するほどステータス上昇。

このまま絶頂させ続けるのはマズイだろうが
ここまできたらこのおっぱいがどこまでデカく
なるのかヤりきりたい！超おっぱい好きとして！

「おほおおぉおおおぉおっ！
肉潰すよりも肉増やす方が気持ちいいよぉっ！
し、新発見っ！　あああああひぃほおおぉおおっ！
まだぁイックゥウウウ～～～～～ッ！」

順調に絶頂を重ね、体の自由を取り戻していく
彼女だったが、膨乳を止めようとする気配が
まるでない。



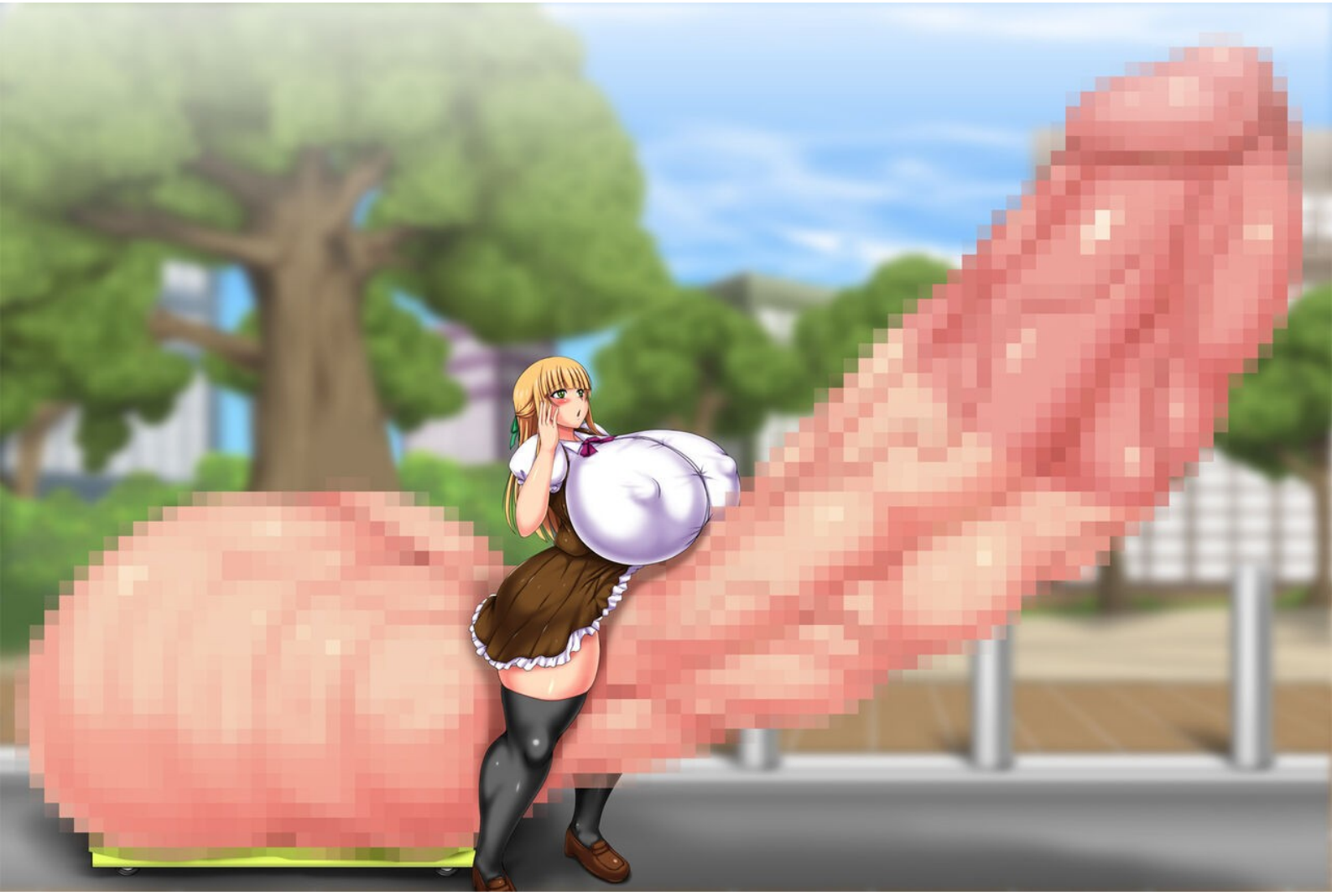
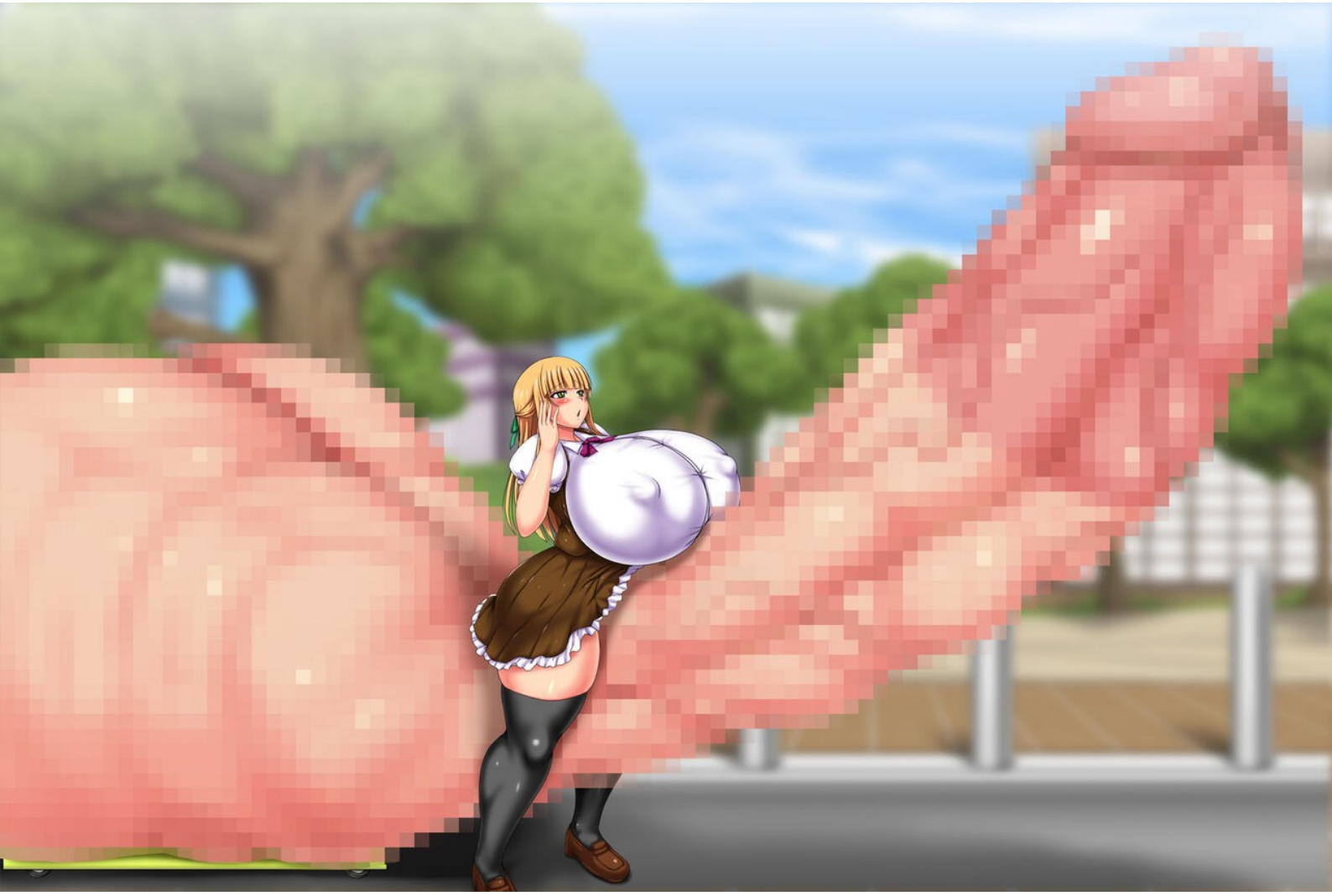
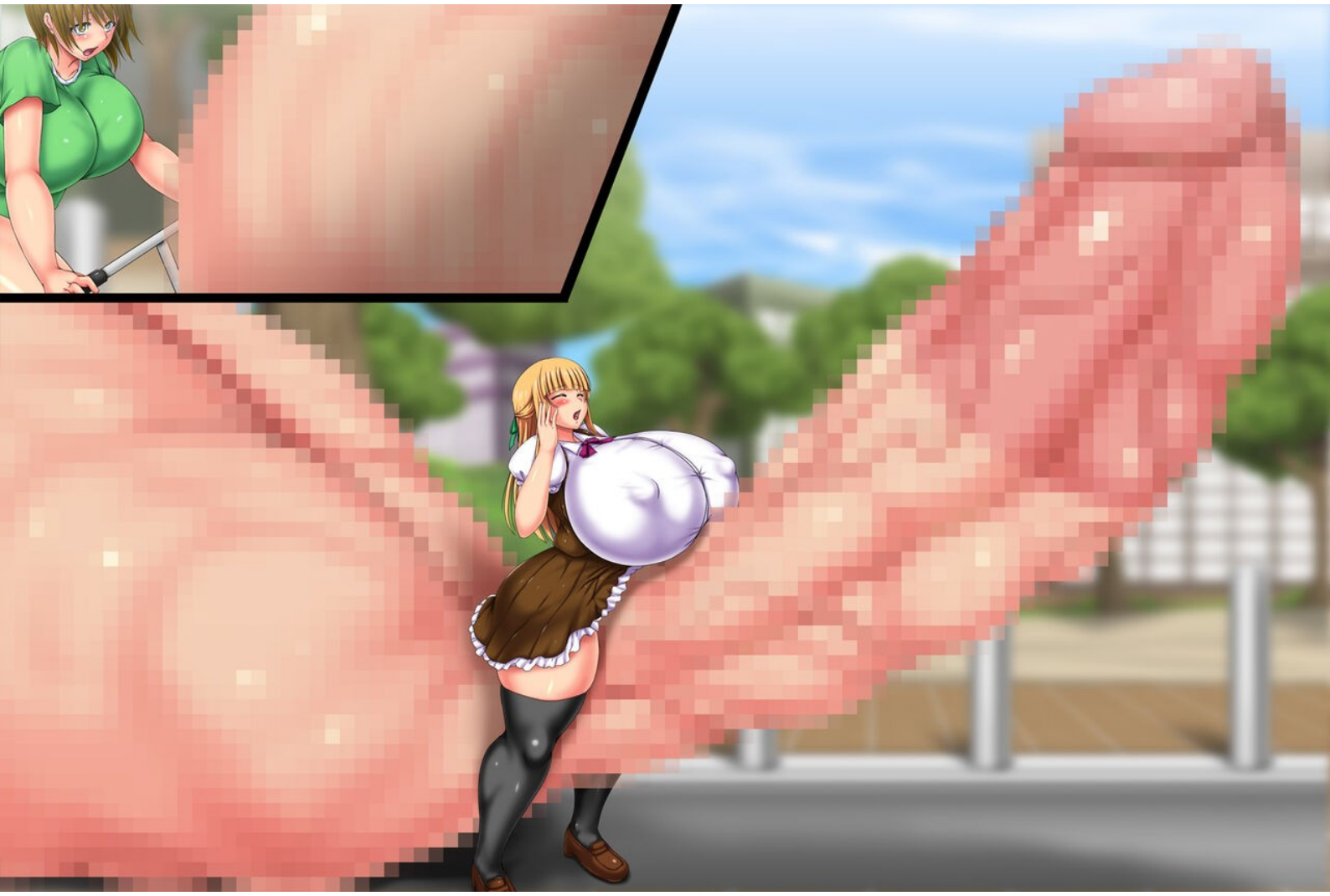
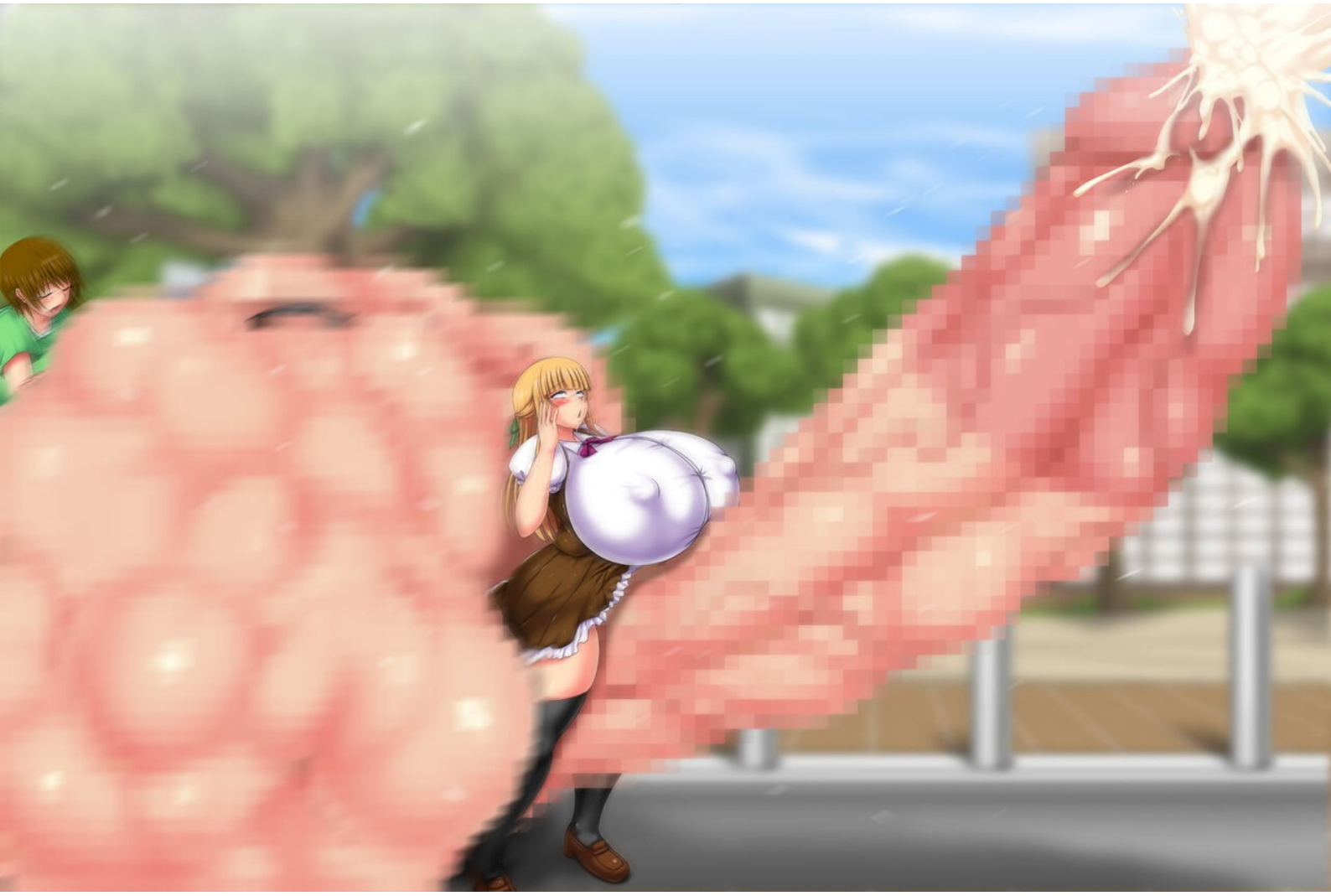
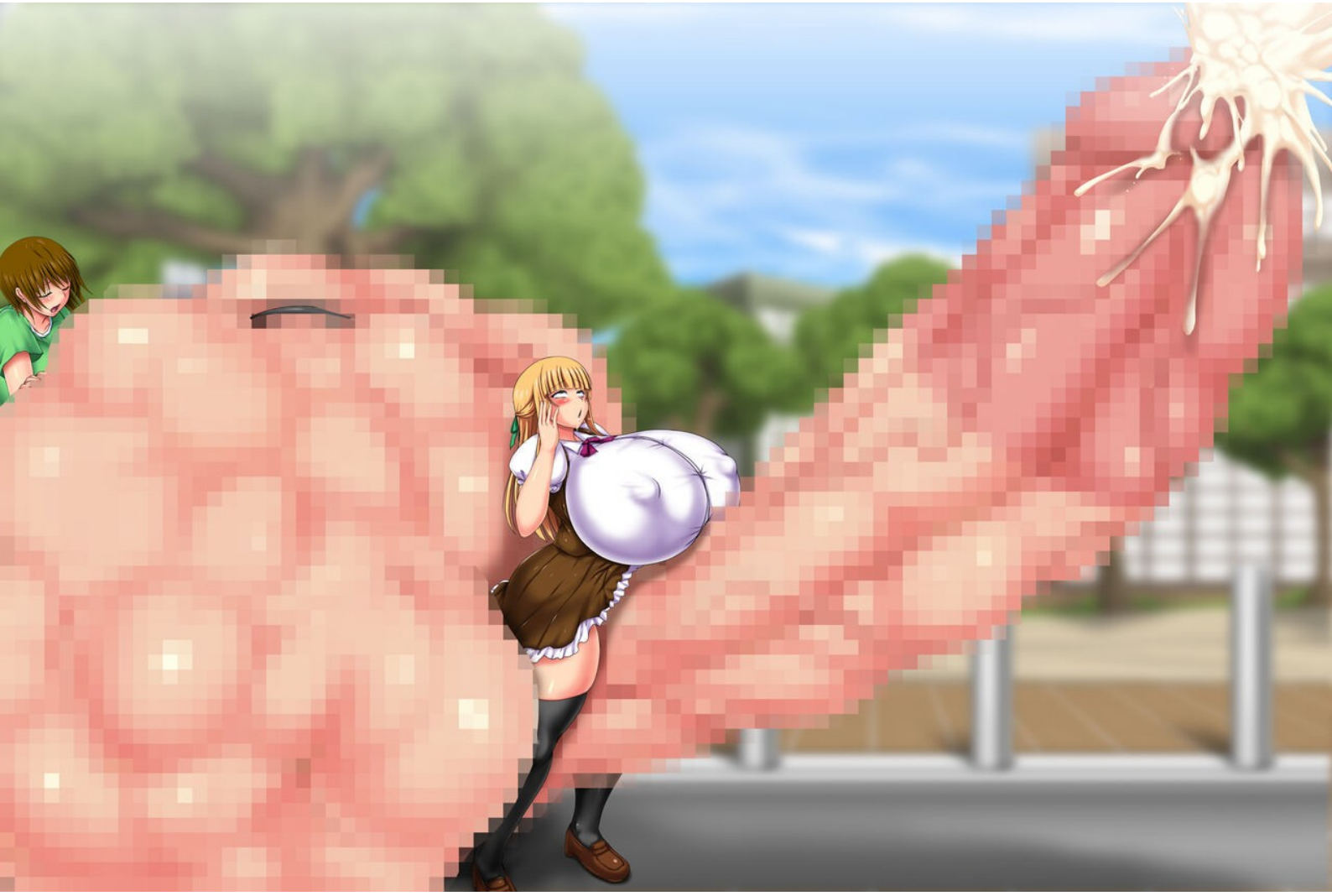
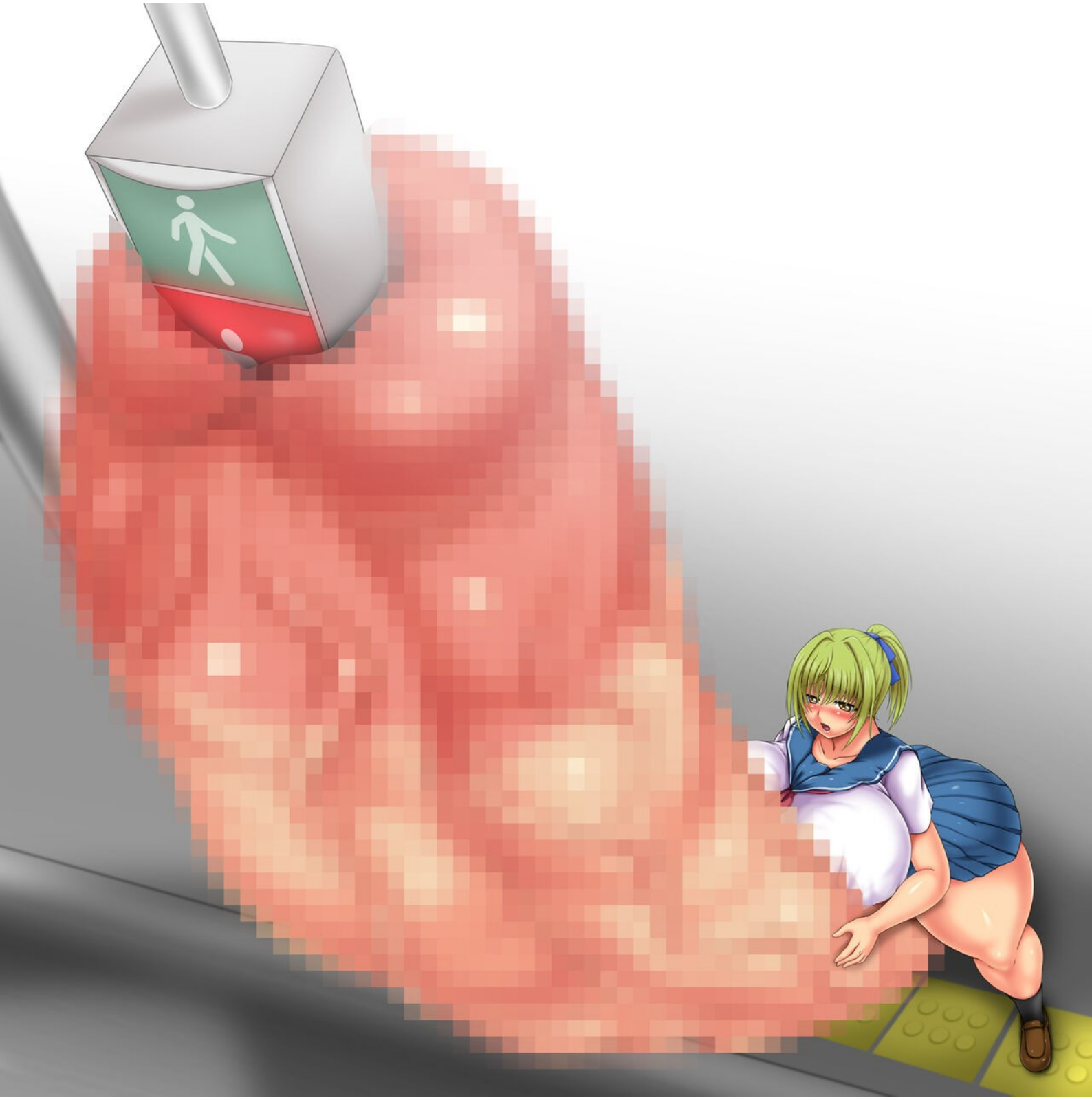
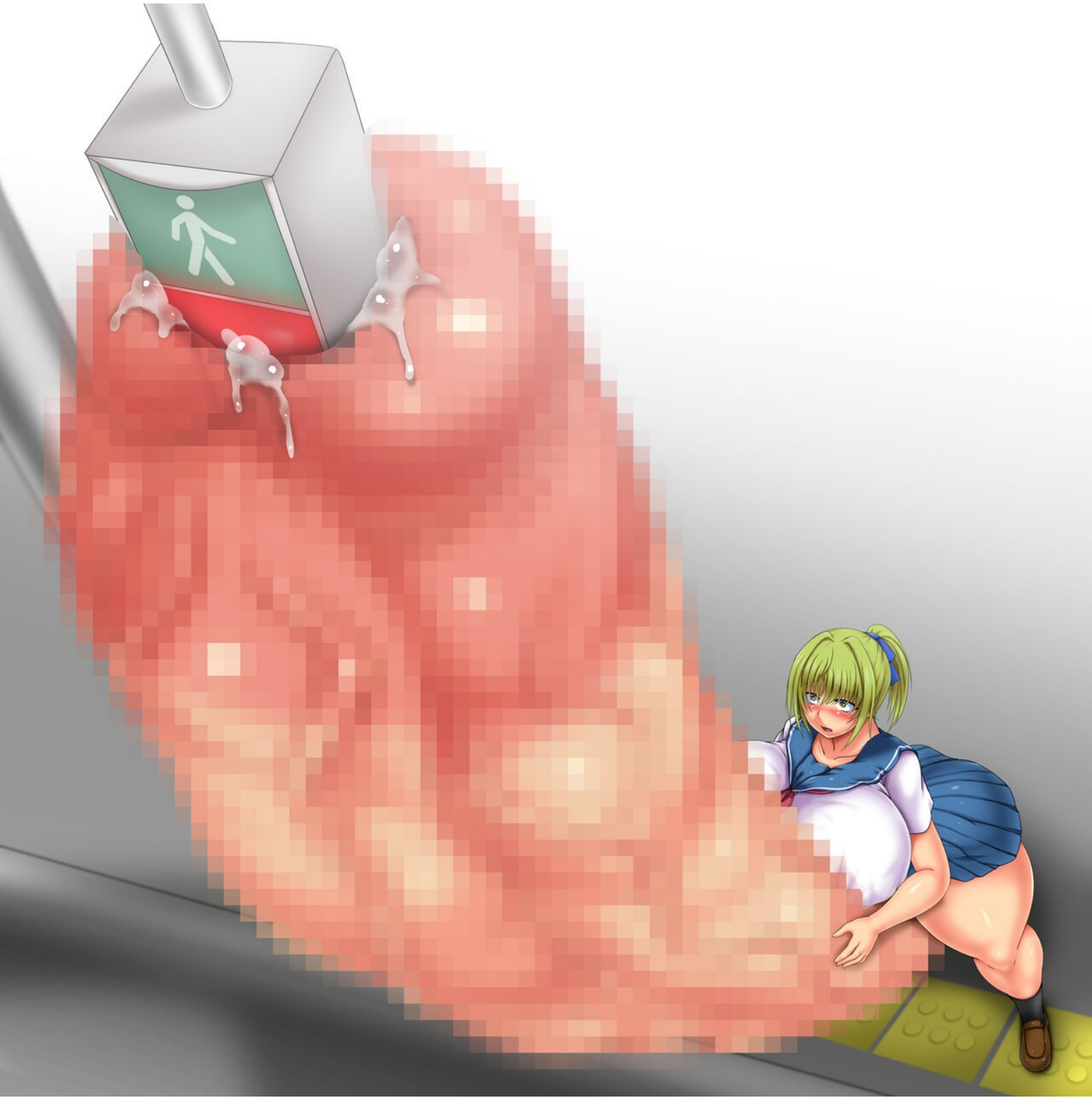
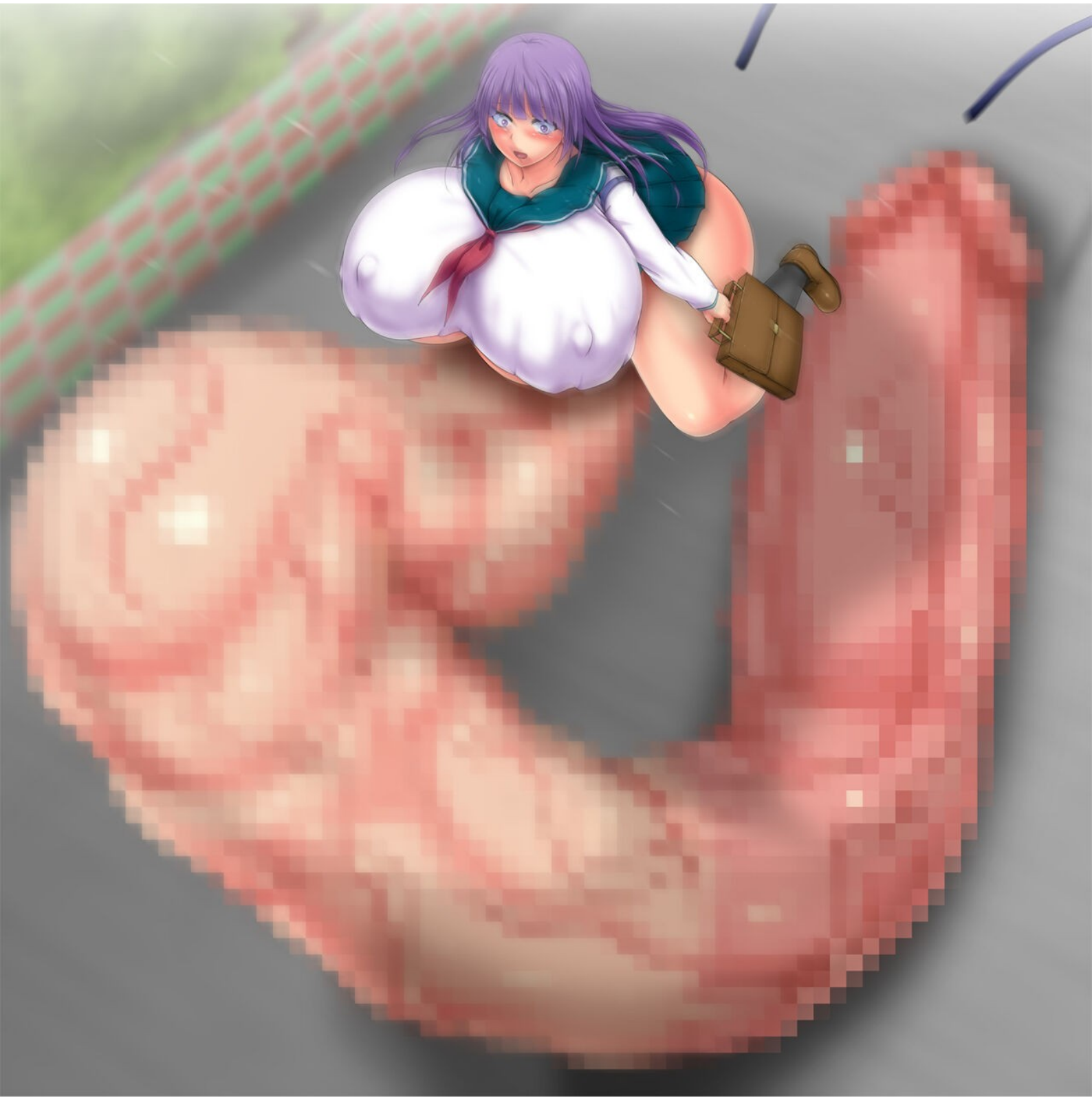
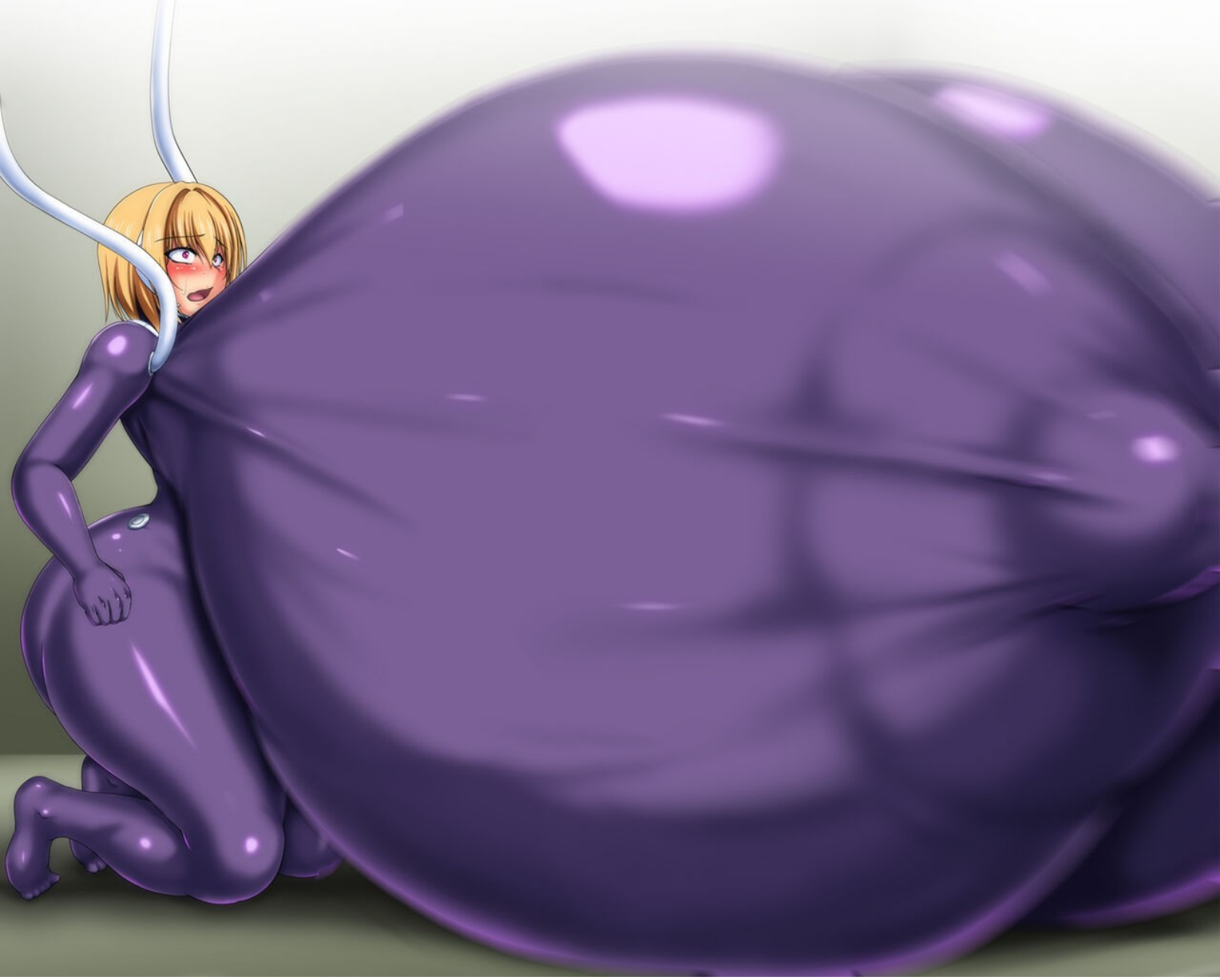
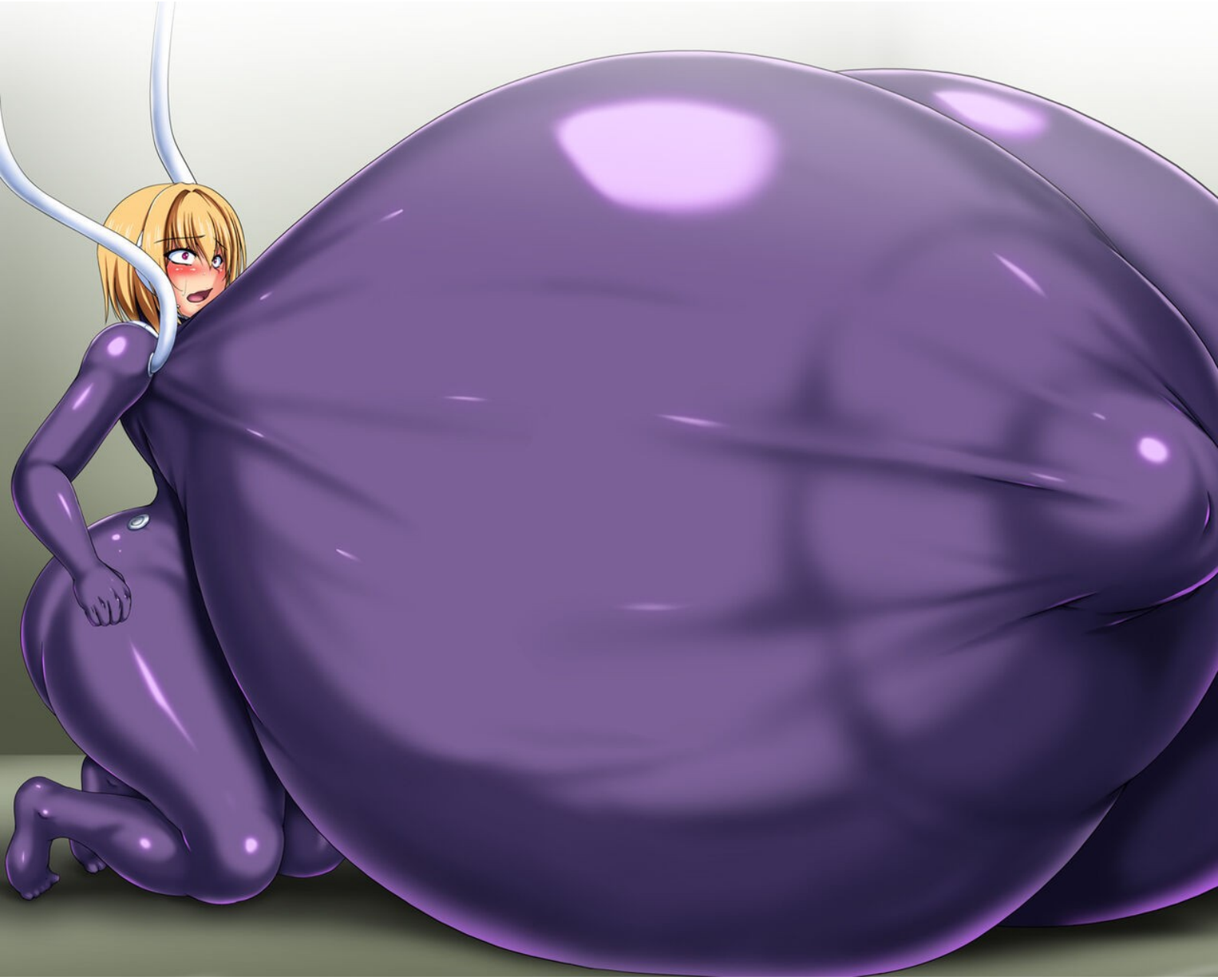
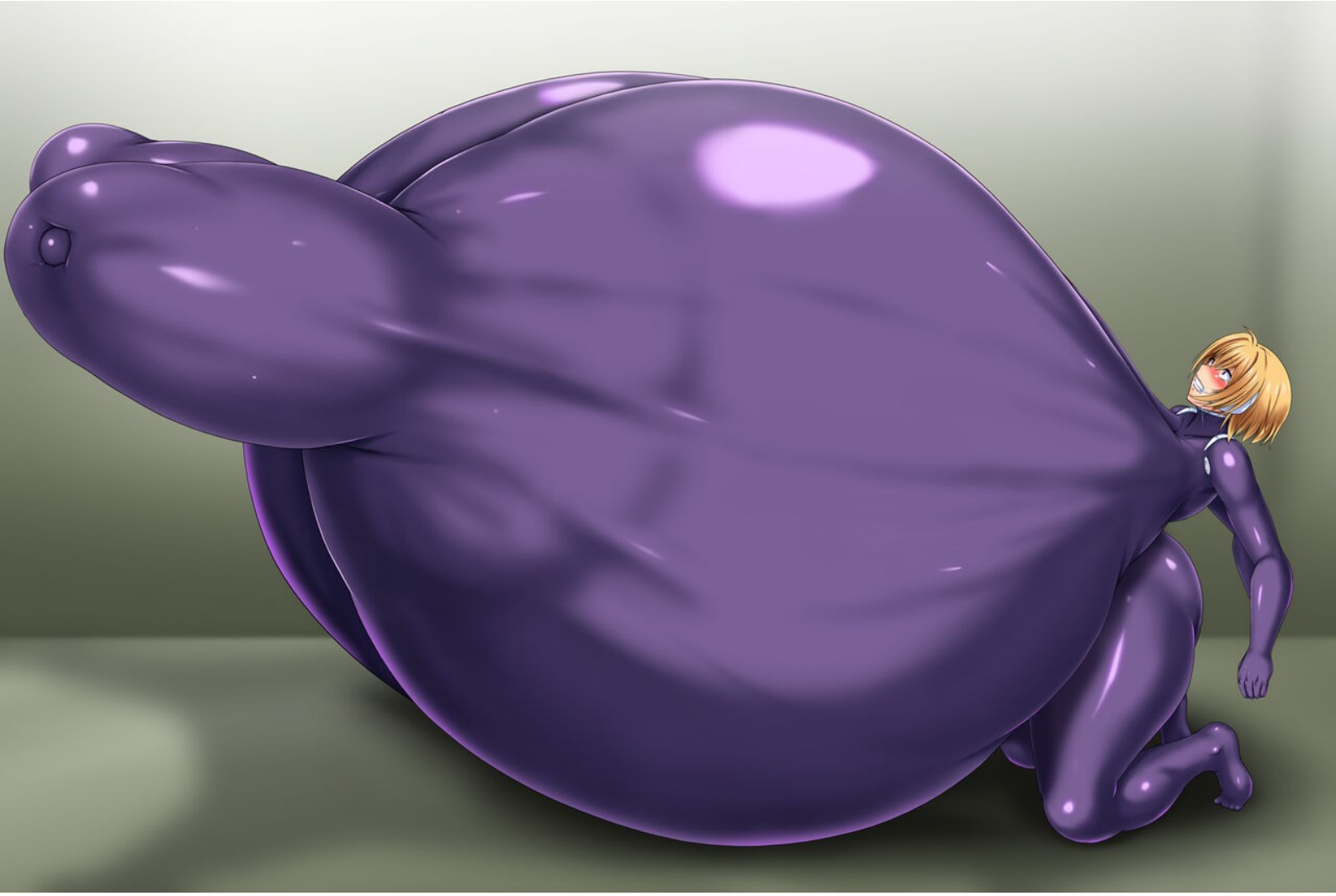
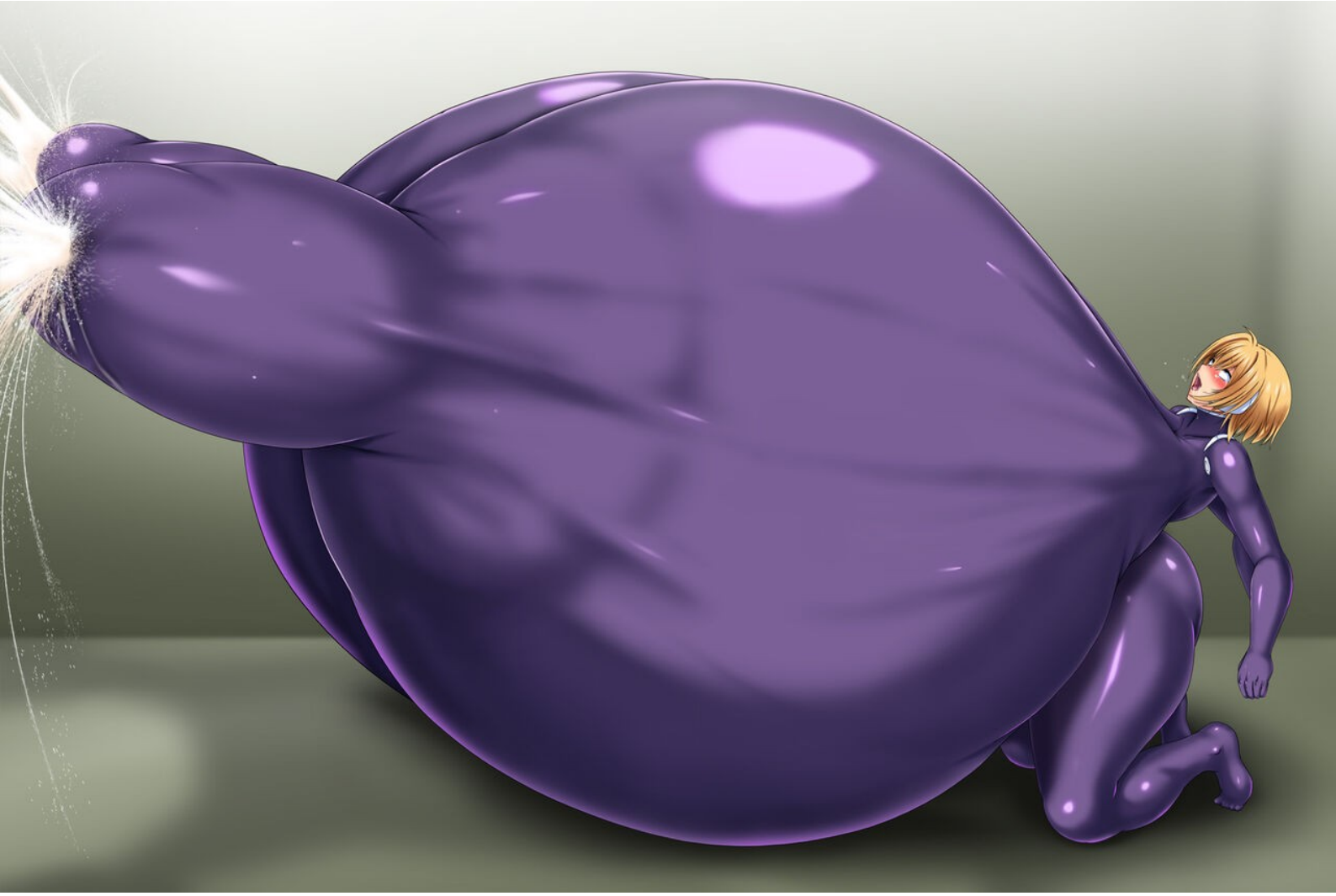
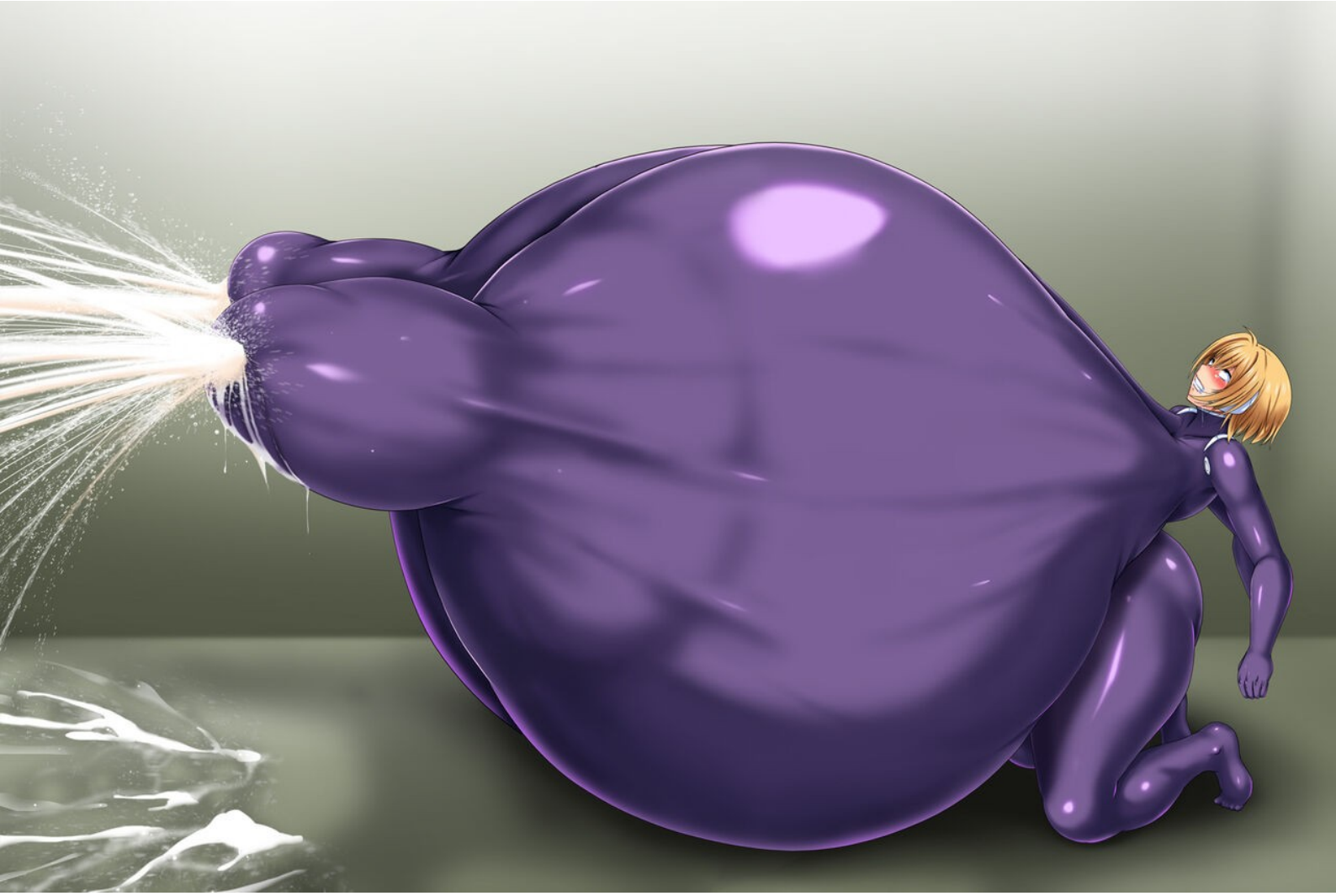
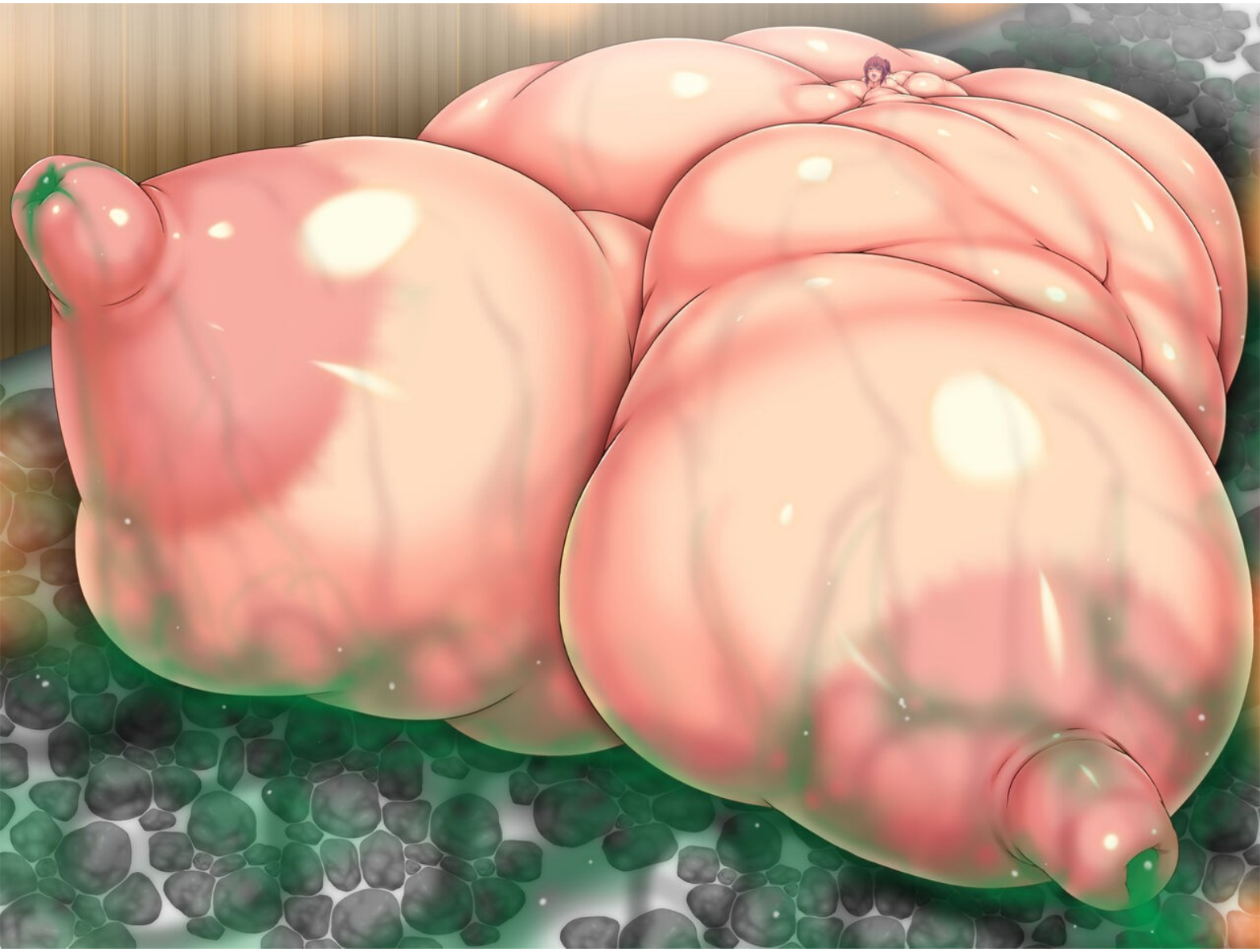
結局、限界まで妨害もなく膨乳しきる。
源泉からの温泉も吸いまくり、おっぱいが風呂から大きく溢れ出たところで膨乳が止まる。

「はぁはぁっ・・・！にゃるほどぉ。
寄生しゅるスライムなんてぇあひぃ初めてだわ。
いいもの手に、いえ、体に入れひゃったぁああんっ♪」

常時イってる状態でステータス爆上げの彼女に
主導権を握られているが、やはり抵抗してこない。
それは「共存」するという彼女の意。

こちらも共存の意思を示し、おっぱいからはみ出させた
スライム体で数十メートルにまで肥大したおっぱいごと
彼女を移動させ始める。

「あああああんっ！　いい子ねぇ。
これからよろしくぅおほぉぉっ！」

こうして予想外にも彼女のアイボウ(愛房)となった自分。
元々自身の欲を満たすために冒険者をしていた彼女と
共に往くのは膨乳の旅。
モンスターを圧殺し強くなり、おっぱい増強でまた圧殺。
イケるところまでイクぜぃ。お嬢っ♪

END